

斐伊川放水路建設予定地内発掘調査 報告書 I

上塙治横穴墓群第17・18・19・38支群

大井谷Ⅲ遺跡

石切場跡1・2

三田谷3号墳

2000年3月

建設省中国地方建設局出雲工事事務所
出雲市教育委員会

斐伊川放水路建設予定地内発掘調査 報告書 I

上塩冶横穴墓群第17・18・19・38支群

大井谷Ⅲ遺跡

石切場跡1・2

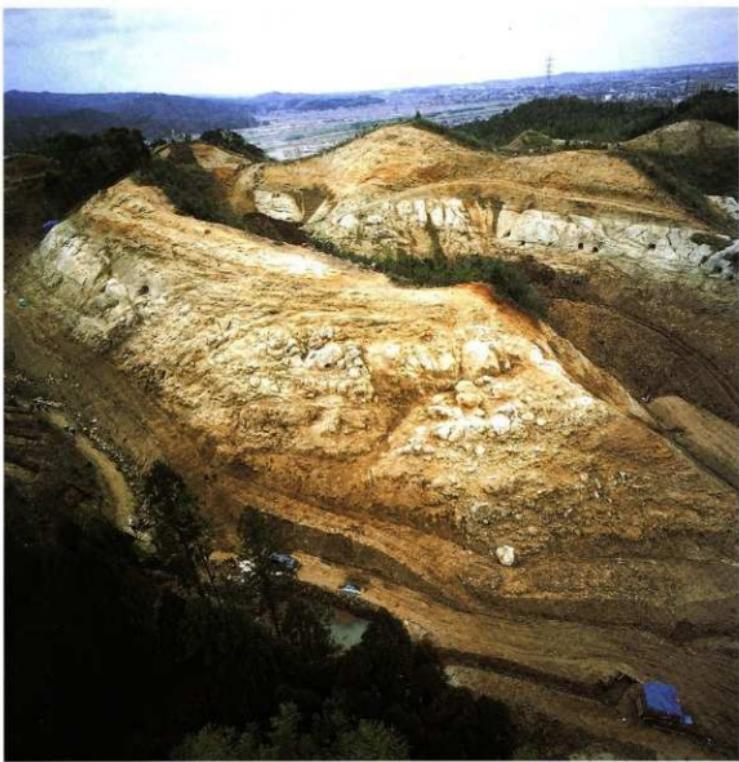
三田谷3号墳

2000年3月

建設省中国地方建設局出雲工事事務所
出雲市教育委員会



上塙治横穴墓群 第17支群 全景



上塙治横穴墓群 第18支群 全景

序

建設省出雲工事事務所では、斐伊川・神戸川流域の抜本的な治水対策として斐伊川放水路事業を推進しています。

事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、現状保存の困難な埋蔵文化財については、必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当事務所では放水路の早期完成を目指し、平成8年度から出雲市教育委員会にご協力いただきて調査を行っています。今回は全国最大規模と呼ばれる上塩治横穴墓群（第17・18・19・38支群）のほか、近世の遺跡も調査しています。

建設省出雲工事事務所といたしましては、今後も出雲市教育委員会と調整を図りつつ、貴重な埋蔵文化財の保存のため調査を円滑に進めていきたいと考えており、本報告書が、埋蔵文化財に対する一層の关心とご理解を得るための資料としてお役立ていただければ幸いに思います。

最後に今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた出雲市教育委員会並びに関係各位に対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

建設省中国地方建設局出雲工事事務所
所長 五道仁実

序

出雲市教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受け、平成8年度以降、斐伊川放水路建設予定地内での発掘調査を行っています。本書は平成8年度から10年度に発掘調査を実施した遺跡について、その調査結果をまとめたものです。

斐伊川・神戸川の二大河川が流れる出雲西部の出雲市周辺地域は、島根県下でも有数の遺跡密集地帯であり、数多くの埋蔵文化財が眠っているところです。今回は斐伊川放水路開削部及び工事用道路部分のうち、上塩治町内の調査を行いました。この調査により、全国最大規模と称せられる上塩治横穴墓群についての史料も大幅に増え、これらは当地域の墓制を考える上で貴重な資料となりうるものであります。

本書が地域の埋蔵文化財に関する理解や歴史学習などに役立てば幸いです。

なお、発掘調査及び本書の刊行にあたりましては地元の方々や建設省中国地方建設局出雲工事事務所をはじめ、各方面からご支援、ご協力をいただきましたことに対し心から厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

出雲市教育委員会

教育長 多久 博

例　　言

- 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、出雲市教育委員会が平成8年度から平成10年度に実施した斐伊川放水路建設予定地内発掘調査の報告書である。
- 調査組織は次の通りである。

調査主体　出雲市教育委員会

○ 平成8年度 [1996]

事　務　局　後藤政司（文化振興課長）、川上　稔（文化財係長）
調　査　員　松山智弘（文化振興課副主任主事）、高橋智也（同主事）
　　　　　　藤永照隆（同）
調　査　補　助　員　渡邊真二（臨時職員）、石橋弥生（同）
　　　　　　富田裕子（同）、藤江美奈子（同）
室内整理作業員　鵜口令子、石川桂子、永田節子

○ 平成9年度 [1997]

事　務　局　後藤政司（文化振興課長）、川上　稔（文化財係長）
調　査　員　松山智弘（文化振興課副主任主事）、遠藤正樹（同主事）
　　　　　　高橋智也（同）、片倉愛美（同）、
調　査　補　助　員　渡邊真二（臨時職員）、松山美奈子（同）、伊藤　寿（同）
　　　　　　富田裕子（同）、竹田章乃（同）、今岡ひとみ（同）、春木崇志（同）
室内整理作業員　鵜口令子、石川桂子、永田節子

○ 平成10年度 [1998]

事　務　局　後藤政司（文化振興課長）、川上　稔（同課長補佐）
調　査　員　岸　道三（文化振興課副主任主事）、松山智弘（同副主任主事）
　　　　　　遠藤正樹（同主事）、高橋智也（同）、片倉愛美（同）
調　査　補　助　員　竹田章乃（臨時職員）、今岡ひとみ（同）、糸賀伸文（同）
　　　　　　鬼村奈津子（同）、春木崇志（同）、矢田知美（同）
室内整理作業員　鵜口令子、石川桂子、永田節子、遠藤恭子、荒木恵理子

○ 平成11年度 [1999]（報告書作成）

事　務　局　大田　茂（文化振興課長）、川上　稔（同課長補佐）
調　査　員　岸　道三（文化振興課副主任主事）、遠藤正樹（同主事）
　　　　　　高橋智也（同）、藤永照隆（同）、片倉愛美（同）
調　査　補　助　員　糸賀伸文（臨時職員）、福田和美（同）、鬼村奈津子（同）
　　　　　　石橋弥生（同）、永瀬周子（同）、今岡ひとみ（同）、竹田章乃（同）
室内整理作業員　石川桂子、永田節子、河井栄子、遠藤恭子
　　　　　　荒木恵理子、吹野初子

3. 調査担当者は次の通りである。

○ 平成8年度〔1996〕

上塙治横穴墓群第17支群	高橋智也
谷Ⅰ区	松山智弘
谷Ⅱ区	藤永照隆

○ 平成9年度〔1997〕

上塙治横穴墓群第18支群	高橋智也
上塙治横穴墓群第19支群	片倉愛美
上塙治横穴墓群第38支群	遠藤正樹
三田谷3号墳	松山智弘
石切場跡1	片倉愛美
石切場跡2	松山智弘
大井谷Ⅲ遺跡	遠藤正樹

○ 平成10年度〔1998〕

石切場跡2	岸 道三
大井谷Ⅲ遺跡	遠藤正樹

4. 発掘作業（発掘作業員雇用、測量発注ほか）については、出雲市教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会島根支部

布村幹夫（現場事務所長）、藤原智治（主任）、金光克至、保科 昭、高橋憲生、（以上技術員）、高崎増美、米井由紀、木村 恵（以上事務員）、

5. 遺物の実測は岸・松山・遠藤・高橋・藤永・片倉・渡邊・伊藤・富田・今岡・竹田・春木・鬼村が行い、写真撮影は調査員が行ったが、X線写真については島根県教育委員会の協力を得た。

6. 発掘調査、並びに報告書作成にあたっては、以下の方々から有益なご助言をいただいた。記して謝意を表しておきたい。（敬称略）

渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）、池田満雄（出雲市文化財審議委員）、内田律夫（島根県埋蔵文化財センター主幹）、西尾克己（同）、大谷晃二（島根県立松江北高等学校教諭）、岩橋孝典（島根県埋蔵文化財調査センター主事）、守岡正司（島根県教育庁文化財課主事）

7. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

8. 方位は各挿図中に示した。

9. 挿図中の縮尺は図中に付した。

10. 本書で使用した遺構記号は以下の通りである。

SB（据立柱建物跡）、SK（土壙）、SX（不明遺構）、SD（溝）

11. 本書の執筆は各担当者が行ったが、谷Ⅰ区については藤永、三田谷3号墳については高橋・片倉が執筆した。編集は各調査員と協議しながら遠藤が行った。

12. 出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

目 次

本文目次

I. 調査に至る経緯と経過.....	(岸)	1
II. 位置と環境	(高橋)	3
III. 上塙冶横穴墓群 第17支群.....		7
1. 上塙冶横穴墓群第17支群の調査.....	(高橋)	7
2. 谷部の調査.....	(藤永)	53
IV. 上塙冶横穴墓群 第18支群.....	(高橋)	67
V. 上塙冶横穴墓群 第19支群.....	(片倉)	84
VI. 上塙冶横穴墓群 第38支群.....	(遠藤)	105
VII. 上塙冶横穴墓群	(高橋)	114
VIII. 大井谷Ⅲ遺跡	(遠藤)	124
IX. 石切場跡1.....	(片倉)	133
X. 石切場跡2.....	(岸)	136
XI. 三田谷3号墳.....	(高橋・片倉)	143

挿図目次

I. 調査に至る経緯と経過

第1図 発掘調査区位置図 2

II. 位置と環境

第2図 出雲平野 主要遺跡分布図 5

III. 上塩治横穴墓群 第17支群

1. 上塩治横穴墓群第17支群の調査

第3図 調査前地形測量図	7
第4図 1号横穴墓 遺構実測図	9
第5図 1号横穴墓 床面加工状況	10
第6図 1号横穴墓 前庭外土層堆積状況図	10
第7図 1号横穴墓 閉塞石出土状況	11~12
第8図 1号横穴墓 前庭外遺物出土状況	13~14
第9図 1号横穴墓 遺物出土状況	15
第10図 昭和53年度 1号横穴墓出土遺物	15
第11図 1号横穴墓 前庭外出土遺物実測図	16
第12図 2号横穴墓 遺構実測図	17
第13図 2号横穴墓 床面加工状況	18
第14図 3号横穴墓 遺構実測図	19
第15図 3号横穴墓 土層堆積状況図	19
第16図 4号横穴墓 遺構実測図	19
第17図 4号横穴墓 土層堆積状況図	20
第18図 5号横穴墓 遺構実測図	20
第19図 5号横穴墓 床面加工状況	21
第20図 6号横穴墓 遺構実測図	22
第21図 6号横穴墓 床面加工状況	23
第22図 7号横穴墓 床面加工状況	23
第23図 7号横穴墓 遺構実測図	24
第24図 7号横穴墓 閉塞石出土状況	25~26
第25図 8号横穴墓 床面加工状況	27
第26図 8号横穴墓 遺構実測図	28
第27図 8号横穴墓 閉塞石出土状況	29~30
第28図 耳環実測図	31
第29図 9号横穴墓 遺物出土状況	31
第30図 9号横穴墓 遺構実測図	32
第31図 9号横穴墓 出土遺物実測図	32
第32図 10号横穴墓 遺構実測図	33
第33図 10号横穴墓 床面加工状況	34
第34図 8号、9号、10号横穴墓配置図	34
第35図 10号横穴墓 閉塞石出土状況	35~36
第36図 11号横穴墓 床面加工状況	37
第37図 11号横穴墓 遺構実測図	38
第38図 11号横穴墓 閉塞石出土状況	39~40
第39図 12号横穴墓 遺構実測図	41
第40図 13号横穴墓 床面加工状況	42
第41図 13号横穴墓 遺構実測図	43
第42図 13号横穴墓 遺物出土状況	44
第43図 13号横穴墓 土層堆積状況	45
第44図 13号横穴墓 遺物実測図	46
第45図 14号横穴墓 遺構実測図	46
第46図 14号横穴墓 土層堆積状況	47
第47図 14号横穴墓 出土遺物実測図	47
第48図 遺構外出土遺物実測図	47
第49図 第17支群 遺構配置図 (平面)	49~50
第50図 第17支群 遺構配置図 (立面)	49~50

2. 谷部の調査	
第 51図 SK01 遺構実測図	53
第 52図 谷1区 遺構配置図	54
第 53図 谷1区 土層断面図	55
第 54図 SK01 出土遺物	56
第 55図 谷1区 遺構外出土遺物	56
第 56図 谷2区 遺構配置図	58
第 57図 谷2区 土層断面図	59
第 58図 SB01 遺構実測図	60
第 59図 ピット列 遺構実測図	60
第 60図 SK01 遺構実測図	61
第 61図 SK02 遺構実測図	61
第 62図 遺構内遺物実測図	61
第 63図 谷2区 遺構外遺物実測図	62
第 64図 遺構外遺物実測図	63
IV. 上塙治横穴墓群 第18支群	
第 65図 調査前地形測量図	67
第 66図 1号横穴墓 遺構実測図	68
第 67図 1号横穴墓 床面加工痕	69
第 68図 1号横穴墓 土層堆積状況図	70
第 69図 1号横穴墓 前庭外遺物出土状況	71~72
第 70図 1号横穴墓 出土遺物実測図	73
第 71図 2号横穴墓 遺構実測図	74
第 72図 2号横穴墓 床面加工痕	75
第 73図 2号横穴墓 土層堆積状況図	75
第 74図 2号横穴墓 遺物出土状況	76
第 75図 2号横穴墓 閉塞石出土状況	77~78
第 76図 2号横穴墓 出土遺物実測図	79
第 77図 ガラス小玉	79
第 79図 第18支群 遺構配置図	81~82
V. 上塙治横穴墓群 第19支群	
第 80図 19支群 平面配置図	84
第 81図 19支群 配置図	85
第 82図 1号横穴墓 遺構実測図	86
第 83図 1号横穴墓 床面加工痕	87
第 84図 1号横穴墓 土層堆積状況	87
第 85図 1号横穴墓閉塞状況 及び遺物出土状況	88
第 86図 1号横穴墓 出土遺物実測図	89
第 87図 1号横穴墓 遺構実測図	90
第 88図 2号横穴墓 床面加工痕	91
第 89図 2号横穴墓 土層堆積状況	91
第 90図 2号横穴墓 出土遺物実測図	91
第 91図 2号横穴墓 閉塞石 及び遺物出土状況	92
第 92図 2号横穴墓 立面図	93
第 93図 3号横穴墓 遺構実測図	94
第 94図 3号横穴墓 床面加工痕	95
第 95図 3号横穴墓 土層堆積状況	95
第 96図 3号横穴墓 遺物出土状況	96
第 97図 3号横穴墓 出土遺物実測図	97
第 98図 4号横穴墓 床面加工痕	98
第 99図 4号横穴墓 遺構実測図	99
第100図 4号横穴墓 土層堆積状況	99
第101図 遺物実測図	100
VI. 上塙治横穴墓群 第38支群	
第102図 上塙治横穴墓群第38支群 横穴墓位置図	105~108
第103図 1号横穴墓遺構図	
第104図 1号横穴墓工具痕 セクション実測図	109
第105図 上塙治横穴墓群第38支群 出土遺物	110
第106図 2号横穴墓遺構図	111
第107図 3号横穴墓遺構図	111
第108図 3号横穴墓工具痕検出状況	112
第109図 2・3号横穴墓縦断セクション	112

VI. 上塙治横穴墓群

- 第110図 上塙治横穴墓群分布図 117~118

VII. 大井谷Ⅲ遺跡

- | | |
|---------------------------------|--------------------------|
| 第111図 大井谷Ⅲ遺跡位臵図 124 | 第115図 SX01出土遺物 129 |
| 第112図 大井谷Ⅲ遺跡遺構全体図 125~126 | 第116図 SX01出土石匙 129 |
| 第113図 調査区土層断面図 127 | 第117図 出土遺物(石器) 130 |
| 第114図 SX01遺構図 128 | 第118図 出土遺物(古錢) 131 |

IX. 石切場跡1

- 第119図 石切場跡1 断面図 134
- 第120図 石切場跡1 平面実測図 135

X. 石切場跡2

- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 第121図 石切場跡2 全体図(平面) 137 | 第124図 石切場跡2 A地点実測図 140 |
| 第122図 石切場跡2 全体図(立面) 138 | 第125図 石切場跡2 B地点実測図 141 |
| 第123図 石切場跡2 セクション図 139 | 第126図 石切場跡2 出土遺物実測図 142 |

XI. 三田谷3号墳

- | | |
|---------------------------------|-------------------------------------|
| 第127図 地形測量図(調査前) 143 | 第139図 9セクション実測図 154 |
| 第128図 外縁列石 144 | 第140図 6セクション実測図 154 |
| 第129図 墳丘及び周辺地形測量図 145~146 | 第141図 6セクション(地山のみ)実測図 155~156 |
| 第130図 地形測量図 147~148 | 第142図 8セクション実測図 155~156 |
| 第131図 石室展開図 131 | 第143図 9セクション実測図 155~156 |
| 第132図 内部主体土層堆積状況① 150 | 第144図 8セクション実測図 157 |
| 第133図 セクションライン 151~152 | 第145図 5セクション実測図 157 |
| 第134図 1セクション実測図 151~152 | 第146図 遺物出土状況 158 |
| 第135図 内部主体土層堆積状況② 151~152 | 第147図 遺物実測図(須恵器) 159 |
| 第136図 2セクション実測図 153 | 第148図 遺物実測図(鉄釘) 160 |
| 第137図 3セクション実測図 153 | |
| 第138図 三田谷3号墳3セクション図 153 | |

I. 調査に至る経緯と経過

I. 調査に至る経緯と経過

斐伊川放水路建設予定地内における埋蔵文化財発掘調査については、建設省中国地方建設局の委託を受け、平成3年(1991)から島根県教育委員会が実施してきた経緯がある。しかし、事業予定地内は從来から埋蔵文化財の大密集地として知られているとともに新たに発見される遺跡も多く、調査量の増大に伴って工事の進捗が遅れている状況にあった。

このような状況の中、平成7年(1995)に事業者である建設省と調査を委託されている島根県教育委員会から出雲市教育委員会に同事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の一部を担当してほしい旨の依頼があった。出雲市教育委員会では当該事業の重要性など考慮してこれを受け、その後二者で協議を重ね、平成8年度から発掘調査の一部を担当することで合意した。なお、この際に発掘調査に係わる県・市の分担は、基本的に県教委が放水路の本体部分、市教委が工事用道路やグリーンステップ、残土処理場など周辺部分について調査していくことを確認している。

以下、平成10年度まで発掘調査を実施してきた出雲市上塩治町大井谷から三田谷へと迂回する工事用道路建設予定地の北側(大井谷部分)について各年度ごとに経過をまとめておく。(第1図参照)

平成8年度

事業予定地には、既に周知の遺跡として上塩治横穴墓群第17支群(12基確認)、第18支群(同2基)、第19支群(同4基)が知られていた。調査はまず、最も西に位置する第17支群周辺斜面の堆積土を新たに横穴墓が存在する可能性に留意しながら除去し、確認していくことから開始した。その結果、同支群で新たに2穴の横穴墓が確認され、計14基の調査に着手し、同年度中に11基の調査を終了した。

また、第17支群の東谷部においては8ヵ所のトレーニングを設定し、試掘調査を実施した。その際に3ヵ所のトレーニングから遺構や遺物が発見されたため、それぞれの遺跡を南から谷1区、谷2区として調査に着手し、同年度中に終了した。

平成9年度

第18支群周辺斜面の堆積土を除去した際、第18支群の南に位置する緩斜面から遺構や遺物が発見され、さらに南に位置する谷奥斜面においても新たな横穴墓が2基確認された。それぞれ大井谷Ⅲ遺跡、上塩治横穴墓群第38支群として第18支群とともに調査に着手している。

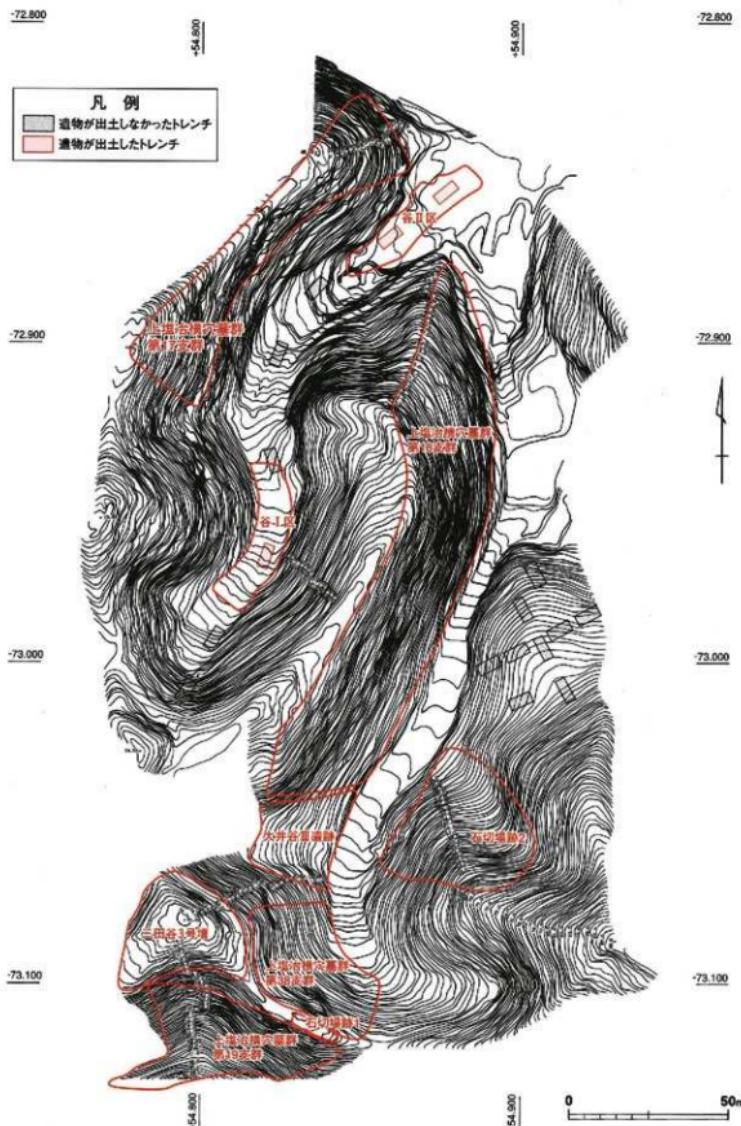
続いて第19支群周辺斜面と北側丘陵上の堆積土を除去していった。この際にも新たな遺跡として丘陵上に古墳1基と石切場跡が発見され、それぞれ三田谷3号墳、石切場跡1として第19支群とともに調査に着手した。

その後、第18支群などが所在する谷部の東側斜面においても堆積土の除去や適時トレーニングを設定して確認調査を行った。その結果、新たな石切場跡が確認され、遺跡名を石切場跡2としている。

なお、平成9年度に着手した調査のうち、上塩治横穴墓群第18支群・第19支群・第38支群・石切場跡1とともに前年度から引き続いて調査していた第19支群についても同年度中に調査を終了した。

平成10年度

前年度から引き続いて調査していた大井谷Ⅲ遺跡・三田谷3号墳とともに石切場跡2の調査にも着手し、同年度中に調査を終了した。



第1図 発掘調査区位図

II. 位置と環境

II. 位置と環境

出雲平野は島根県の東部、宍道湖の西側に位置する沖積平野である。現在では斐伊川と神戸川の沖積作用により、出雲市、平田市、簸川郡斐川町・湖陵町にまたがる広い範囲に平野が形成されている。しかし、現在の出雲平野の様相を呈するようになったのは、近世になってからのことである。奥出雲でたら製鉄による「鉄穴流し」によって土砂の流入が激しくなり、比較的短時間に現在の出雲平野が形成された。それまでの出雲平野のほとんどは湿地帯であったと考えられている。

旧石器・縄文時代においては縄文海進によって、出雲平野のほとんどが海になっていたことが明らかになっている。この縄文海進が海退へと移っていくのは縄文時代の晩期になってからであり、その影響でその後は徐々に陸地が現れるようになる。

奈良時代になると、出雲國風土記に記載のある「神門水海」が平野の内部に広がっており、斐伊川・神戸川ともここに注いでいたようである。

以下、時代ごとに概観しておきたい。

①旧石器・縄文時代

出雲平野における旧石器時代の遺跡は現在のところ発見されていない。

もっとも古い遺跡として、出雲平野の北に位置する菱根遺跡や西側の砂丘下に形成された上長浜貝塚が縄文時代早期末に出現する。その後も縄文時代前期末から中期かけて上ヶ谷遺跡（斐川町）が知られるのみでほとんど人間の活動の様子をすることはできない。

後期から晩期にかけては、平野の縁辺部に遺跡が営まれる傾向はそれまでと変わらないものの、平野南部には丸木舟が出土した三田谷1号遺跡、平野南西部には御領田遺跡（湖陵町）・三部竹崎遺跡（湖陵町）・平野南東部には後谷遺跡（斐川町）が出現する。また、平野部においても矢野遺跡で縄文土器の出土が見られ、徐々にではあるが、平野部に人々が進出していく様子がうかがえる。

②弥生時代

弥生時代前期においては縄文時代より引き続き、平野縁辺部を中心として遺跡が営まれる。しかし、本格的に人々が平野部への進出を果たすのは弥生時代中期中葉を待たなければならない。

弥生中期になると斐伊川・神戸川の氾濫による流路の変化や沖積作用によって形成された3ヵ所の微高地に集落が営まれるようになる。その中でも古志本郷遺跡・天神遺跡・下古志遺跡は、環濠の存在が明らかになっており、環濠集落としての大きな居住地が形成されていたと考えられている。

後期になると、これらの集落遺跡の隆盛を背景として出雲平野南側丘陵上に西谷墳墓群が出現し、四隅突出型墳丘墓の築造が始まる。西谷墳墓群では合計6基の四隅突出型墳丘墓が築造されており、その中でも島根大学考古学研究室によって発掘調査が実施された西谷3号墓では、その出土土器より吉備や北陸との交流があったことが指摘されている。

後期に入っても集落は引き続き営まれるが、この時期をピークとして徐々にかけりを見せていくようになる。

③古墳時代

古墳時代前期になると、それまで栄えてきた集落が衰退していく。この原因は未だ判明していないが、前期古墳があり多く築造されないことがそれを示している。

中期に入ると平野南側丘陵周辺では三田谷I遺跡が営まれ、平野南西部には浅柄遺跡に人々の住んでいた形跡がある。平野中心部では集落跡と確認できる遺構は未だ発見されていないが、古墳時代前期に衰退した平野中心部の遺跡からは若干中期後葉の土器が出土しているため、このころから平野縁辺部に住んでいた人々が平野部へ再進出していった可能性がある。

墓制については古墳時代にはいると大型墳墓の築造が激減する。現在、出雲平野における前期古墳は平野北東部の縁辺に築かれる大寺古墳(前方後円墳)、平野西側の神西湖東岸に築かれる山地古墳(円墳)、西谷墳墓群の一角にある西谷7号墓が知られるのみである。

そして、中期に入っても北光寺古墳・西谷15号墳・16号墳が築造されるものの、古墳の数はあまり増加しない。

出雲平野において古墳文化が花開くのは後期にはいってからといつても良いだろう。まず、後期前半には平野南東部の丘陵上に上島古墳(半田市)が出現する。そして、後期中葉頃になると今市大念寺古墳を初めとして上塩冶築山古墳、地蔵山古墳といった首長墓が神戸川右岸に築造される。また、神戸川左岸の丘陵上には妙蓮寺山古墳、放れ山古墳、小坂古墳といった古墳が次々と築造され、古墳文化が盛行するようになる。また、この時期より真幸ヶ丘丘陵上に神門横穴墓群が、上塩治町の丘陵上に上塩治横穴墓群が造られる始める。

終末期になると徐々に古墳の数は減り、横穴墓の築造が主流となる。特に古墳時代後期より造られ始めた上塩治横穴墓群(約180穴)と神門横穴墓群(約100穴)は全国的に見ても大規模な横穴墓群であり、終末期における2大墓域としての性格を持つと思われる。しかし、最近の調査では上塩治横穴墓群の周辺で三田谷2号墳・3号墳・光明寺4号墳・大井谷古墳・狐廻谷古墳といった後期から終末期にかけての古墳が次々と確認されており、全ての古墳が横穴墓に取って代わられたわけではないことを示している。

現段階では古墳時代後期・終末期の集落跡は発見されていないが、こういった今市大念寺古墳を初めとする首長墓の出現や後期古墳の増加、横穴墓の盛行などを考えると、人口も増加し、集落が盛行していたのである。

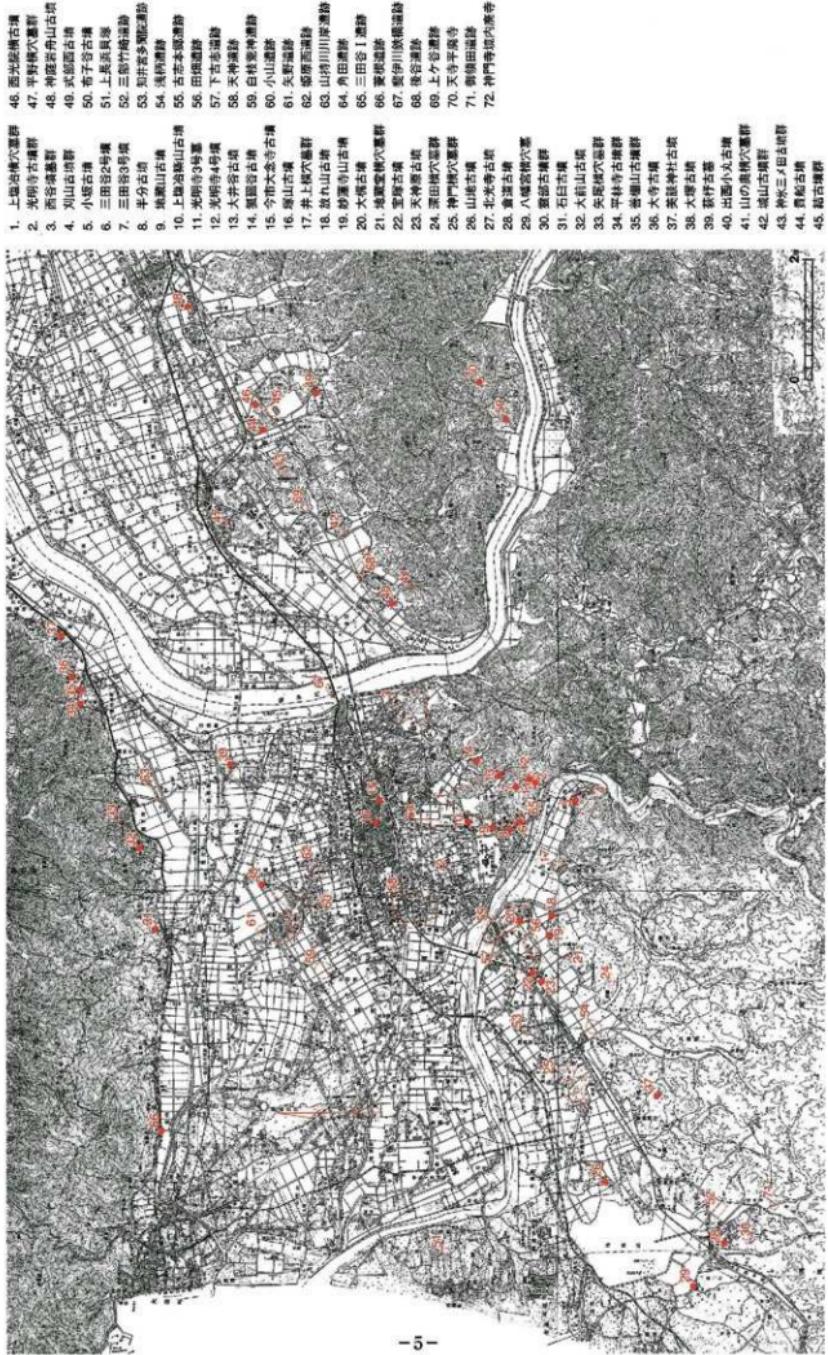
④奈良時代

古代において出雲平野には神門郡と出雲郡の2行政区画が定められた。この「郡」を統括していた官庁が「郡家」である。発掘調査の成果により神門郡家は古志本郷遺跡、出雲郡家は後谷遺跡(斐川町)周辺に比定されている。

また、733年に編纂された「出雲國風土記」によると神門郡には二所、出雲郡には一所の新造院が建立されているとの記述がある。出雲平野における古代寺院は現在、神門寺境内廢寺(神門郡朝山郷新造院?)・天寺平廢寺(斐川町)(出雲郡河内郡新造院?)が知られている。

また、奈良時代に入ってからは光明寺3号墓が出現する。これは、石製骨蔵器直葬でありながら墳丘を持ち、古墳時代の要素をいろよく残した火葬墓である。全国的にも数例しかなく注目されている。

第2図 出雲平野主要遺跡分布図



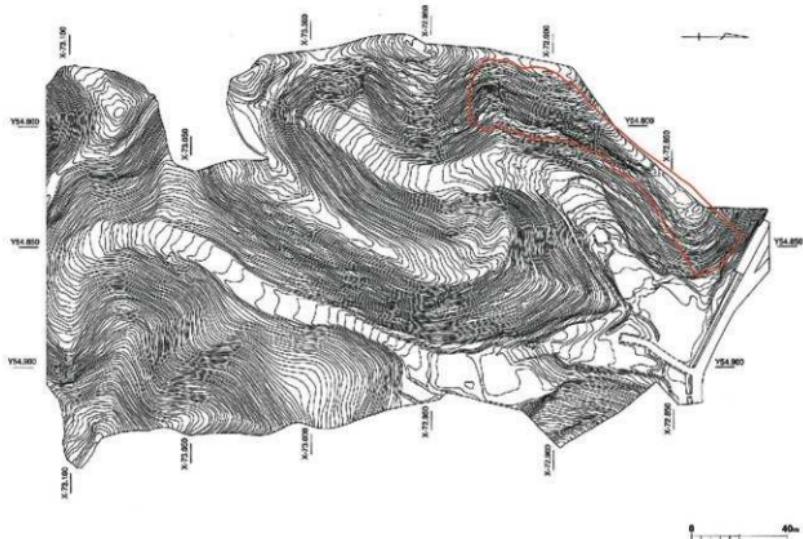
III. 上塩冶横穴墓群 第17支群

III. 上塩治横穴墓群第17支群

1. 上塩治横穴墓群第17支群の調査

上塩治横穴墓群第17支群は出雲平野の南側大井谷の奥に派生する小さな谷の南斜面に位置する。この横穴墓群は14基よりなり、上塩治横穴墓群の中でも比較的大きい支群である。

これら14基の横穴墓は大きく3グループに分けられる。1号～6号横穴墓が第1グループをなし、谷の一番奥側に一列に並んでいる。また、第2グループとして8号～13号横穴墓のまとまりがみられ、このグループは狭い凝灰岩層に2段に分けて造墓される。そして、この第1グループと第2グループの間に挟まれて、7号横穴墓が単独でこの支群の中ではもっとも高い場所に造られているといった状況である。



第3図 調査前地形測量図

注：調査段階ではこのグループをそれぞれA群・B群・C群と呼称し、この内で横穴墓番号をつけていたが、本報告書では、同支群内であることから、通して横穴墓番号を付け直している。旧番号と新番号は別表のとおり対応する。

本報告書横穴墓名	発掘調査時横穴墓名
1号横穴墓	B群 1号横穴墓
2号横穴墓	B群 2号横穴墓
3号横穴墓	B群 6号横穴墓
4号横穴墓	B群 3号横穴墓
5号横穴墓	B群 5号横穴墓
7号横穴墓	C群 1号横穴墓
8号横穴墓	A群 1号横穴墓
9号横穴墓	A群 7号横穴墓
10号横穴墓	A群 2号横穴墓
11号横穴墓	A群 3号横穴墓
12号横穴墓	A群 4号横穴墓
13号横穴墓	A群 5号横穴墓
14号横穴墓	A群 6号横穴墓

上塙治横穴墓群第17支群 新・旧横穴墓名対照表

本支群は昭和53年度に斐伊川放水路治水計画着工に先立ち埋蔵文化財分布調査を実施した際に、島根県教育委員会によって支群内の大部分に関しては発掘調査を行われている。その対象となったのは1号・2号・4号・5号・6号・7号・10号・11号・12号横穴墓である。

当時の発掘調査においては前庭・羨道・玄室のみの調査にとどまっていた。そこで今回の調査では前庭外の調査をするため、これら調査済みの横穴墓についても再度調査を実施することにした。しかし、横穴墓の前庭外はその立地が急斜面であるため、土層すら確認できないものがほとんどであった。

第1グループ

第1グループは第17支群の1番谷奥のグループであり、1号横穴墓から6号横穴墓の6基から構成されている。第17支群が位置するこの谷は1号横穴墓のあたりより急に南へ曲がっていくが、これより奥には横穴墓の造墓を行っていない。6基とも標高48m付近にほぼ横並びに造墓されており、その上下への造墓はみられない。

1号横穴墓

この造構は第17支群の中で最も谷奥に造られている、玄室形態が妻入り家型を呈する大型の横穴墓である。

開口方向はE～43°～Sである。

遺構(第4・5図)

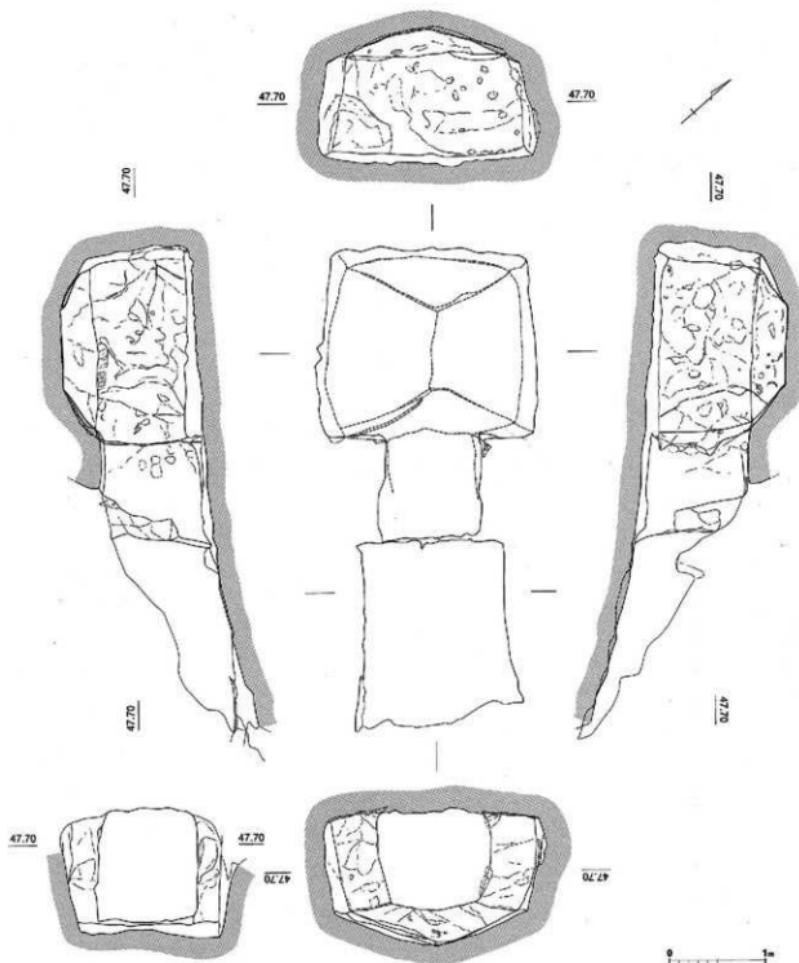
前庭

幅1.45m～1.65m、長さ1.9mを測る。比較的長い前庭であり、羨門部分に凝灰岩切石を使用した閉塞石が残存している。壁面は多くが残存しており、風化のため明瞭な加工痕は認められないものの平

滑に調整しているようである。壁面と床面との境ははっきりしている。床面については加工痕が認められないほど荒く成形されており、ゴツゴツとしている。加工痕としては壁面近くに平刃痕が若干確認できる。

羨道

幅1.03m、長さ1.07m、高さ1.11mを測る。断面形は羨門付近で綾長長方形、玄門付近では胴張りの



第4図 1号横穴墓 遺構実測図

ほぼ正方形をしている。羨道内には大きな凝灰岩の栗石が散乱していた。

玄室

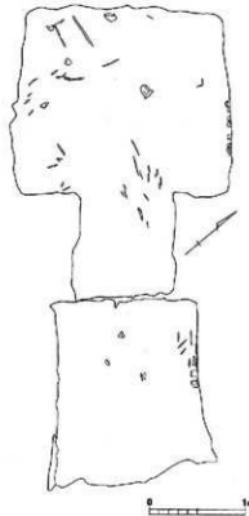
幅2.28m、長さ1.97m、高さ1.39mを測り、平面プランはほぼ正方形を呈している。軒線、四注線及び床面と壁面の界線は明瞭に造られているが、調整がしっかりなされているとは言い難く、ゴツゴツとした印象を受ける。奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、天井部に至っており、玄門の軒線は羨道天井部に向かって付けられている。

また、付ける場所を間違ったのか、入り口側の四注線に線の付け替えが認められる。

床面には若干あるが加工痕が認められた。羨道付近では溝状加工痕、壁面近くでは円刃で施したと思われる加工痕が観察できた。

閉塞状況(第7図)

玄室に向かって右側に凝灰岩切石、左側に凝灰岩栗石が用いられている。これらは、羨門部分及び羨道、玄室に散乱しているが、盜掘の際に散乱したものであろう。閉塞石の出土状況より考えると、羨道を栗石で閉塞した後、羨門に板石を立てたと考えられる。



第5図 1号横穴墓 床面加工状況

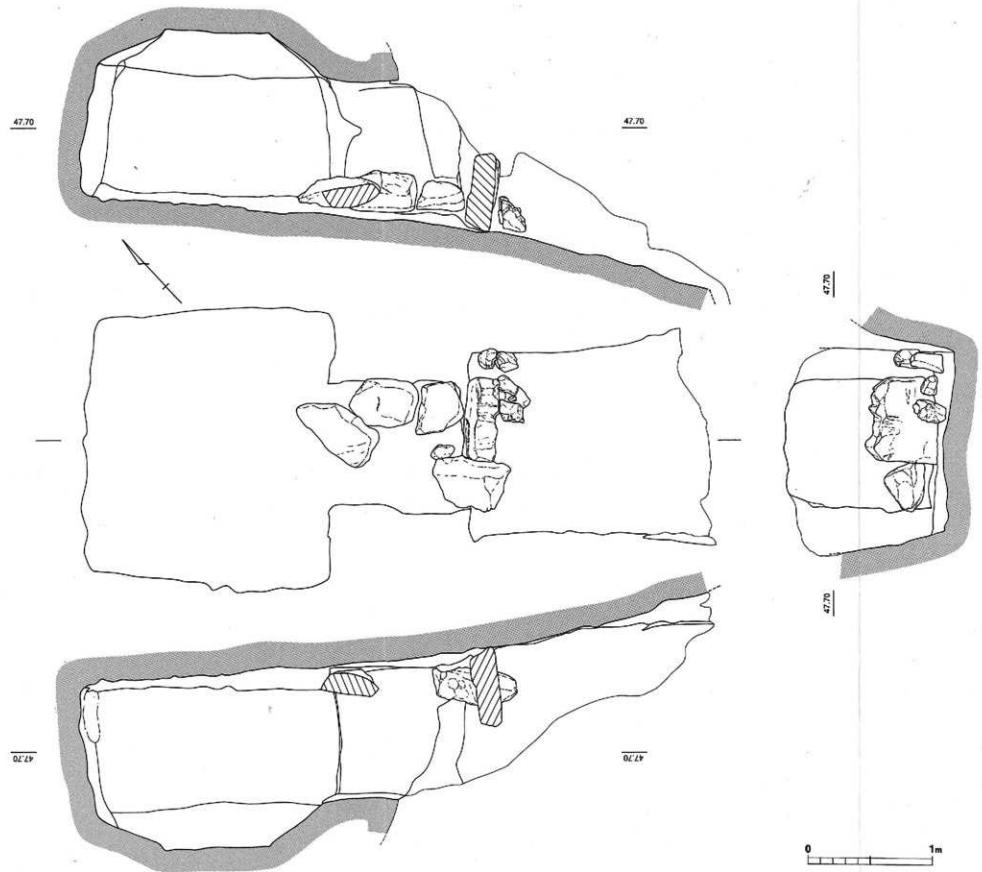
土層堆積状況(第6図)

昭和53年度に1度完掘されているため、前庭より奥の土層はそれ以後に堆積したものである。

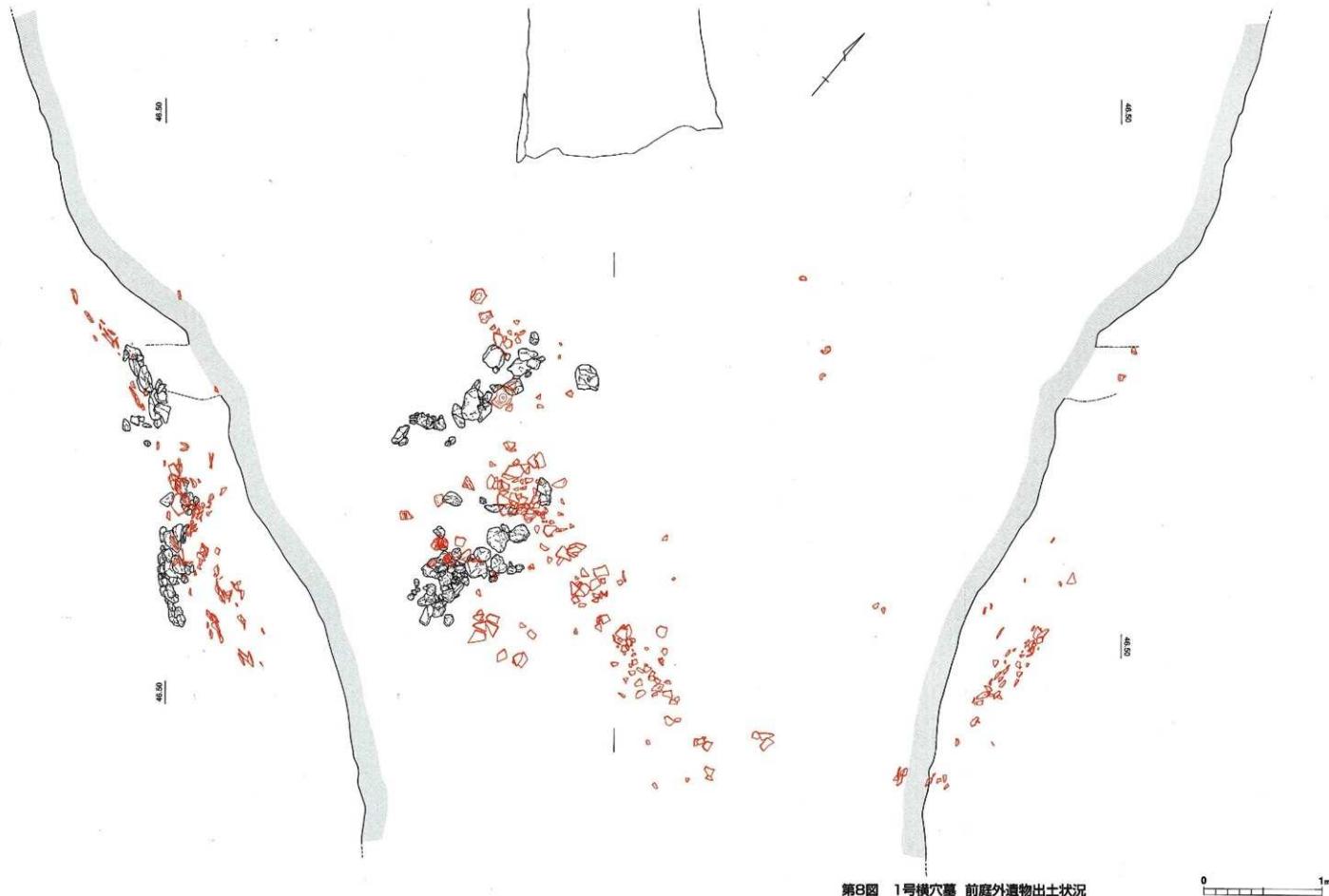
前庭外は比較的なだらかであったため、土層が観察できた。12層は含有物がほとんどなく、非常に良くしまっているため地山だと考えられる。この上に堆積している9層中からは須恵器の大甕がバラバラの状態で散乱していたため、1号横穴墓が造墓された時点では12層が露出していたと考えられる。しかし、土層の堆積状況を見ても前庭部分の継ぎや供獻をするような平坦面を作り出すような人為的な加工は認められなかった。



第6図 1号横穴墓 前庭外土層堆積状況図



第7図 1号横穴墓 閉塞石出土状況



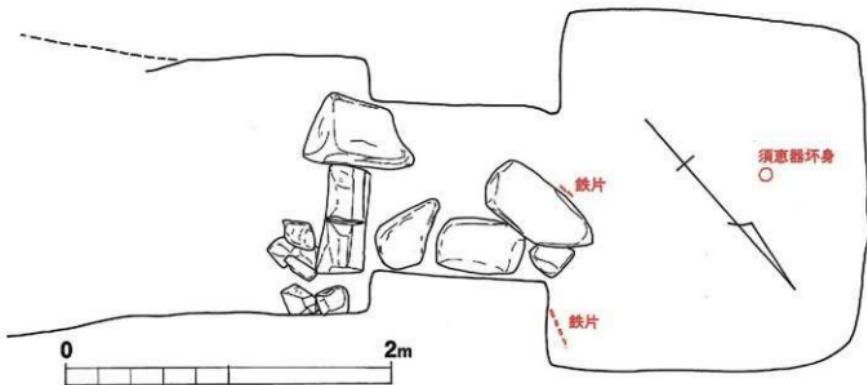
第8図 1号横穴墓 前庭外遺物出土状況



遺物出土状況（第8図）

横穴墓内からは昭和53年度の調査の際に須恵器類が出土しているがほとんどの出土状況は不明である。

また、今回の調査においては前庭外より須恵器の出土が見られた。全てが破片の状態で出土したが、須恵器の大甕である。出土状況として特筆すべきは、12層上の一一番上位部分に底部がまとまった状況で出土し、その下方より体部以上が比較的小さい破片で出土している。このことより、底部があった場所に大甕が供献されたが、何らかの理由により壊れて破片が流出したことが考えられる。



第9図 1号横穴墓 遺物出土状況（島根県教育委員会原図）

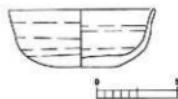
遺 物（第11図）

出土した破片よりみると大甕3個体分が混在しているようであるが、実測に耐えうるものは1個体及び口縁部の一部のみである。

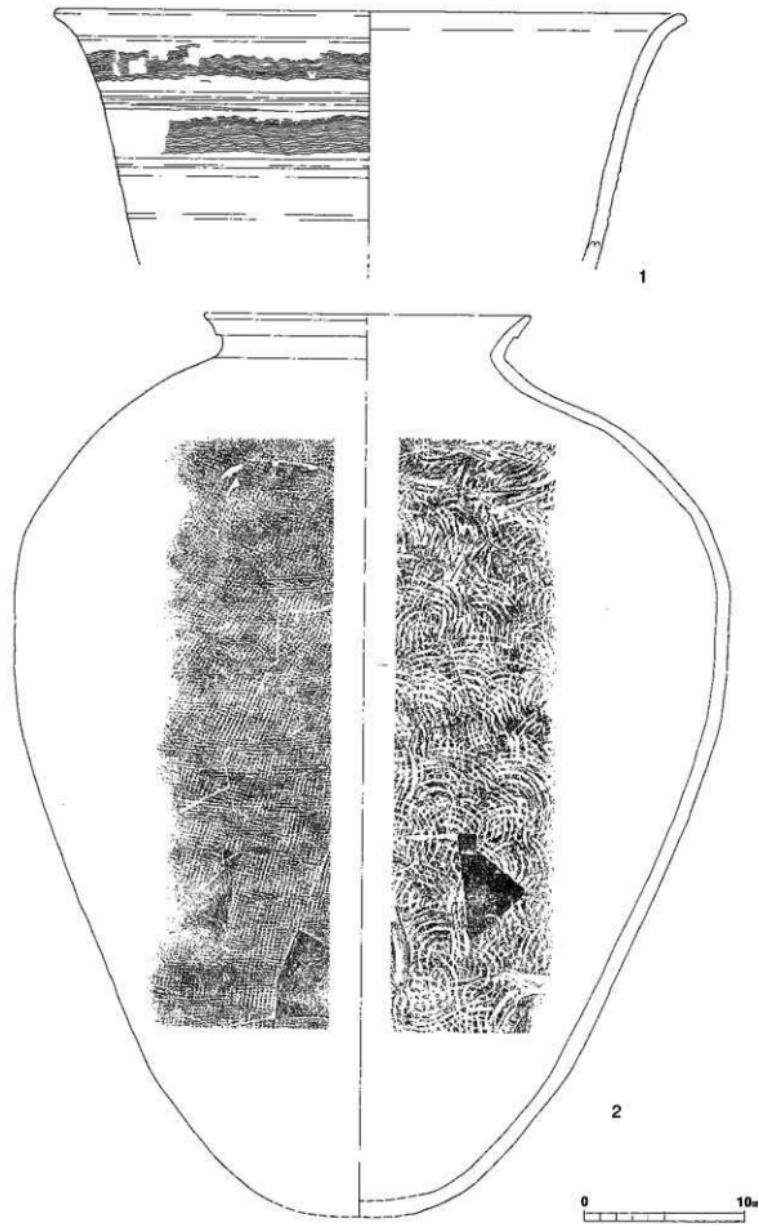
1は須恵器大甕口縁部である。外面には沈線を巡らせ、その間に櫛による波状文が施されている。

2は須恵器大甕であり、ほぼ完形に復元できた。口縁部はわずかに拡張しており、1とは全く違った形状を呈している。

調整等、詳細については遺物観察表にゆずる。



第10図 昭和53年度 1号横穴墓出土遺物



第11図 1号横穴墓 前庭外出土遺物実測図

2号横穴墓

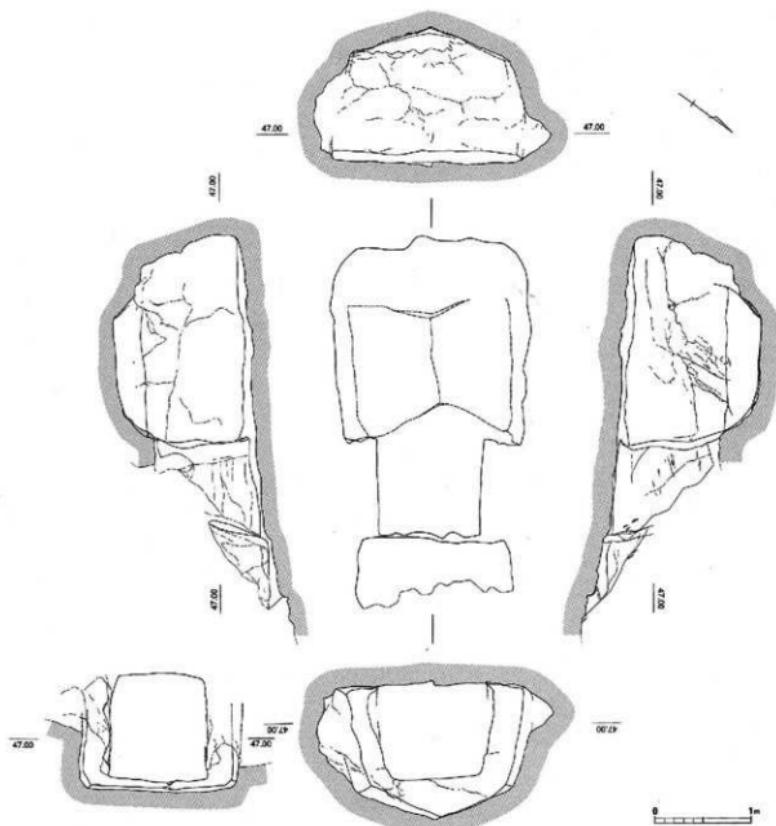
全体的に風化、崩落が激しく原形を留めている場所は少ないので、小型の精緻な横穴墓であったようである。なお、2号横穴墓が造られている岩盤は凝灰岩と角礫を多く含む凝灰岩質砂岩にまたがっている。

開口方向はE~26°~Sである。

遺構（第12・13図）

前庭

幅1.58m、長さ0.73mを測る。非常に短い前庭であるが、その周辺地形より見ても岩盤が大きく崩落した様子はなく、造墓当初より短く造られていたようである。



第12図 2号横穴墓 遺構実測図

壁面はあまり残っていないものの床面との境は、明瞭である。壁面は風化が激しく加工痕は確認できないが、床面については刺突痕や円刃による加工痕が多く認められた。

羨道

幅1.07m、長さ0.9m、高さ1.07mを測り、平面プランはほぼ正方形を呈している。また、断面形は縦長方形である。羨門部では前庭に比べ1段高くなっている、羨道と前庭は明確に区別されている。

羨道の床面にも加工痕が多く残されており、溝状加工痕や平刃による加工痕など様々である。また、壁面についても若干の加工痕が残されている。

玄室

幅2.01m、長さ2.19m、高さ1.45mを測る。

他の横穴墓と比べ小型な家形妻入りの玄室形態である。平面プランは壁面の崩落のためか、奥壁部分はあいまいであるが、ほぼ正方形を呈していたものと思われる。羨門付近は崩落もなく、きれいに仕上げられており、奥壁付近とは対称的である。側壁と床面の界線や軒線といった家形を形作る線は非常に明瞭であるうえ各面とも平滑に調整されている。丁寧に造られたと思われるが、表面の剥離が激しいため加工痕を認めるることは困難である。床面の加工痕は羨門付近に若干残されているだけであり、それよりも奥については調整された様子がみられない。また、両側面の一部には崩落跡であろうか、大きくえぐれてしまっている。また、奥壁にも大きな崩落跡が見られ、それらはちょうど岩質が変化する場所にあたり、そのことが崩落した一因と考えられる。

閉塞状況

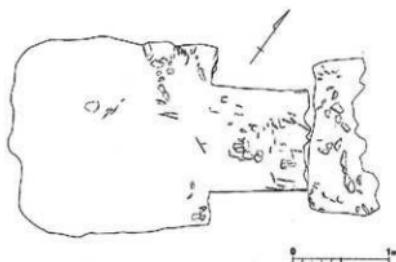
この横穴墓でははっきりと閉塞石と思われる板石や石積みのようなものは検出できなかったが、前庭部分に凝灰岩の栗石が若干散乱していたため、これらを積んで閉塞を行っていた可能性もある。

土層堆積状況

この横穴墓も以前に調査されているため、横穴墓内に堆積している土はそれ以降のものである。また、前庭外に土層の不整合面が見られたが、これは前回の調査によるものである。

出土遺物

出土遺物は確認できなかった。



第13図 2号横穴墓 床面加工状況

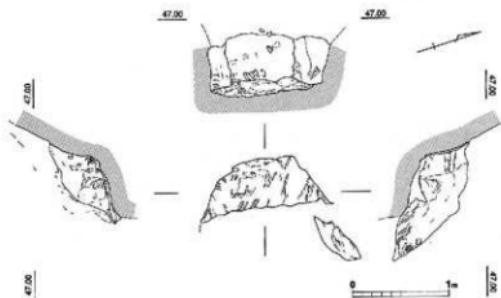
3号横穴墓

新たに発見された遺構である。

遺構（第14図）

平面プランは幅1.39m、奥行き0.51mの半円状を呈し、床面は平らに加工されている。2号横穴墓のすぐ東側にあり、大きくえぐられている様子もないため、掘削当時より大きく形が変わっていないものと思われる。

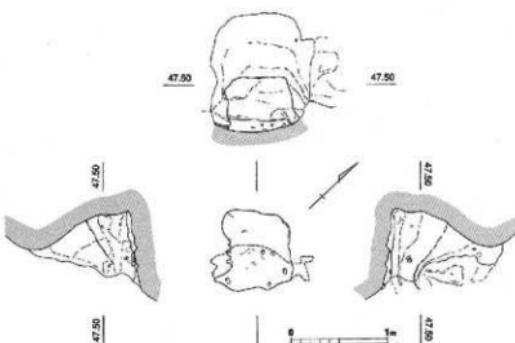
出土遺物もなく、土層堆積状況（第15図）も人間の手の入った痕跡が認められないため、墓として利用されたとは考えにくく、この遺構の性格は不明である。床面が平らに加工されているため、9号横穴墓のように供獻物を置くための施設である可能性も考えられようが現段階では明言できない。



第14図 3号横穴墓 遺構実測図



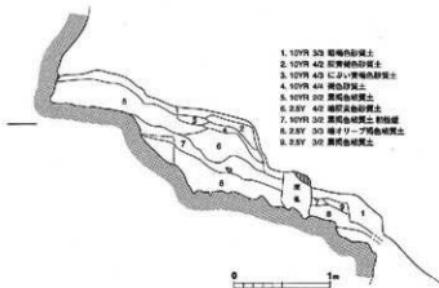
第15図 3号横穴墓 土層堆積状況図



第16図 4号横穴墓 遺構実測図

土層堆積状況（第17図）

前回に調査されているために、遺構内の土層についてはそれ以後の堆積である。（第6層以上）第7層以下については前回調査以前の土層であるものの、特に人の手が加わった形跡はなかった。



第17図 4号横穴墓 土層堆積状況図

5号横穴墓

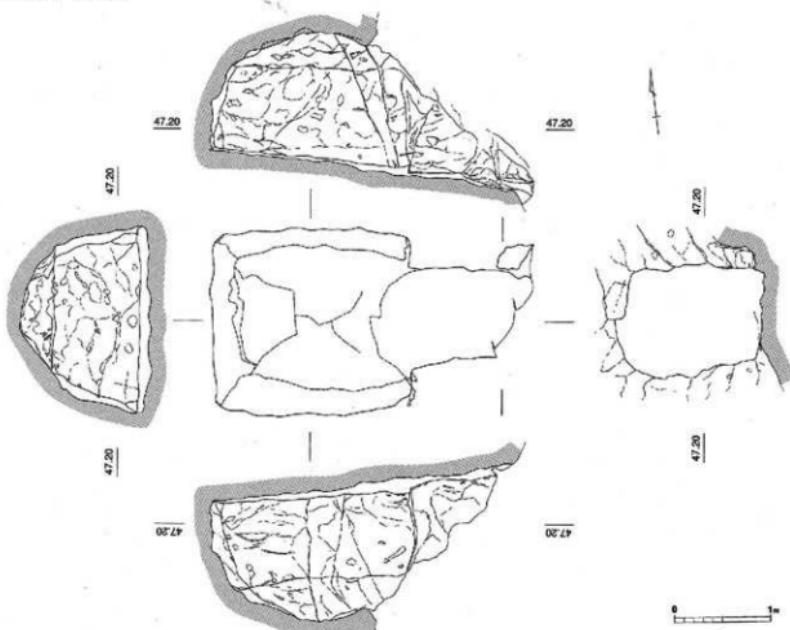
この横穴墓は妻入家形を呈しているが、風化が進んでおり壁面の剥離や崩落が激しい。

開口方向はE~8°~Sである。

遺構（第18・19図）

前庭

ほとんどが崩壊しているものの、右側の一部のみが90cm程残存している。この部分については1段高くなっている。



第18図 5号横穴墓 遺構実測図

羨道

最大幅1.05m、最小幅0.9m、長さ0.92mを測る。高さについては、天井が玄室途中から崩落しており、不明である。玄室に近づくにつれ羨道幅が大きくなつてき平面プランは縦長の逆台形を呈する。

玄室

幅1.9m、長さ2.03m、高さ1.33mを測る。平面プランはほぼ正方形であり、玄室形態は家形妻入りを呈する。玄室の断面形を見る限りはっきり家形をしているとはいはずアーチ形に近い形であるが、四注線や棟線を確認できるため家形とした。

壁面と床面の界線ははっきりしているものの、軒線、棟線や四注線といったものは不明瞭である。加工痕の痕跡を見つけることが困難なほど全体的に荒く造られており、造墓途中で何らかの理由により墓として使用しなければならなくなつたと考えられる。軒線等はその結果、急遽、付けたものではないだろうか。

玄門は崩落のため当時の姿を保っていない。

閉塞状況

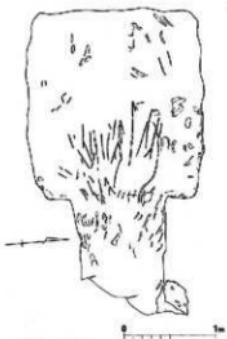
閉塞に用いたと思われるものは全く出土しなかつたため、不明である

土層堆積状況

昭和53年度の調査で完掘されているため割愛する。前庭外の土層についてはほとんど残っていないかった。

出土遺物

遺物の出土は見られなかった。



第19図
5号横穴墓 床面加工状況

6号横穴墓

この横穴墓は第17支群唯一の平入り横穴墓である。要所要所はきちんと造られているため、精緻な横穴墓のようであるが、実際はゴツゴツとした印象を受ける。

開口方向はE~13°~Sである。

遺構(第20・21図)

前庭

幅1.57m、長さ0.82mを測り、非常に短い前庭である。残存状況から見て、風化によって崩壊していると思われる。他の横穴墓と比べ幅が狭く、壁面の残存は良いとはいえないものの床面に対して直立しており、10号横穴墓の前庭と類似する。

一部に円刃による加工痕が認められる。

羨道

幅1.09m、長さ1.18m、高さ1.1mを測る。平面プランは縦長長方形を呈し、幅に対する長さの割合が他の横穴墓に比べ大きい。また、断面形は縦長長方形である。そして、羨門部では段が認められず、

羨道と前庭の境は明確ではない。

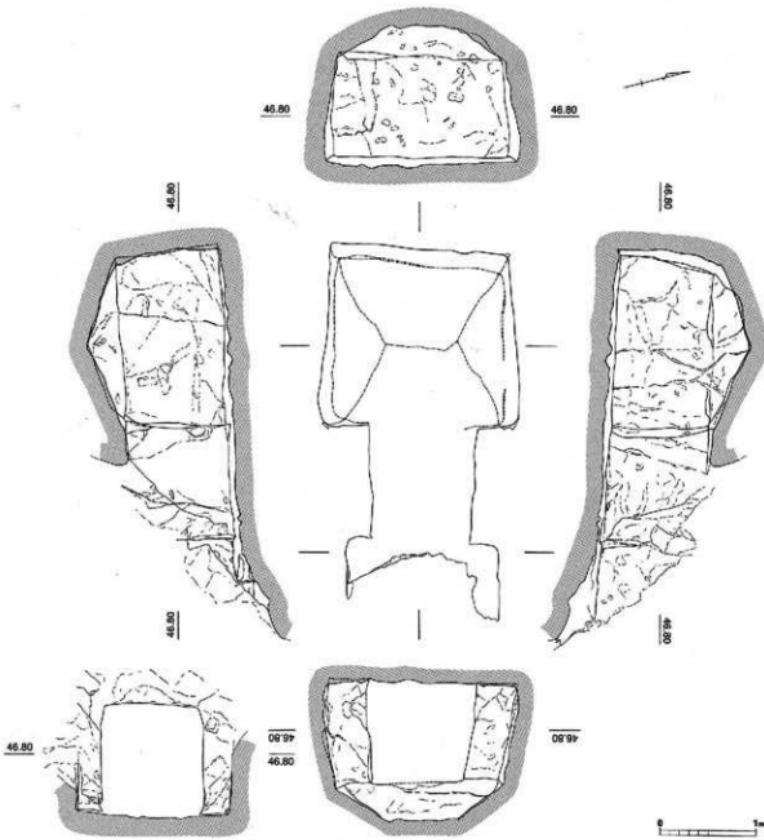
壁面には風化のため加工痕が見られないものの、床面においては多くの溝状加工痕が残されている。

玄室

幅1.99m、長さ1.89m、高さ1.44mを測る。数値的にはほぼ正方形であるが、実際の平面プランは先細りするいびつな形状をしている。床面と壁面の界線及び軒線は明瞭であるものの、四注線や棟線といった天井部分の玄室を構成する線は、岩肌がゴツゴツしており必ずしも明瞭ではない。

玄門については若干上部に剥離が見られるものの、きちんとした長方形を呈しており、玄室部の作りの雑さとは相反している。

また、床面はゴツゴツしているものの、加工痕が観察できた。



第20図 6号横穴墓 造構実測図

閉塞状況

閉塞状況を示すものは何も出土しなかった。

土層堆積状況

昭和53年度の調査において完掘されているため省略する。前庭外の土層については残存していなかった。

出土遺物

遺物の出土はみられなかった。

第2グループ

第17支群では最も高い場所に単独で位置する。

7号横穴墓

第17支群の中でも玄室規模が1・2位を争う大型の横穴墓である。

開口方向はE~25°~Sである。

遺構(第22・23図)

前庭

幅1.64m、長さ2.37mを測る。比較的長い前庭を持っているうえ、壁面の残存状況が良好で羨道近くにおいては1.31mの高さにまで達する。床面には溝状加工痕が多く残されている。また、壁面についてほとんどが風化による剥離が激しいものの、羨道付近には若干平刃による加工が施されている。

羨道

幅1.08m、長さ1.18m、高さ1.04mであり、玄室に近づくにつれ羨道の幅が広がっている。幅に比べて長い羨道である。一方、高さは変わっていないので、玄門は横長の台形を羨道には逆に縦長の台形を呈する。

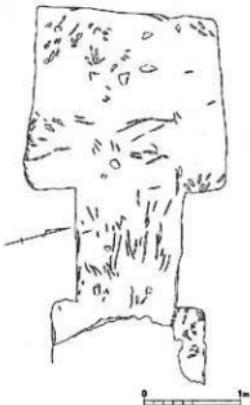
壁面に加工痕はあまり残されていないものの、床面では溝状加工痕や円刃による加工痕が多く残されている。

なお、羨道部では前庭に比べ一段高くなっており、羨道と前庭の境は明確である。

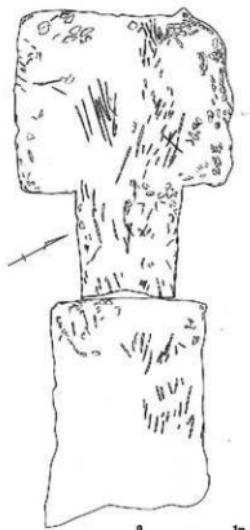
玄室

幅2.2m、長さ1.93m、高さ1.28mを測る。平面プランは横長長方形であり、家型妻入の大型の玄室である。床面と壁面の界線や軒線、四注線といった、家型を形成する境は非常に明瞭である。しかし、その作りは雑であり中央部分の横断面においては、家形とは思えないほどいびつな形である。また、左側の軒線については付け替えの跡が確認できた。

加工痕は壁面に刺突痕や平刃によるものが多く残されている。



第21図
6号横穴墓 床面加工状況



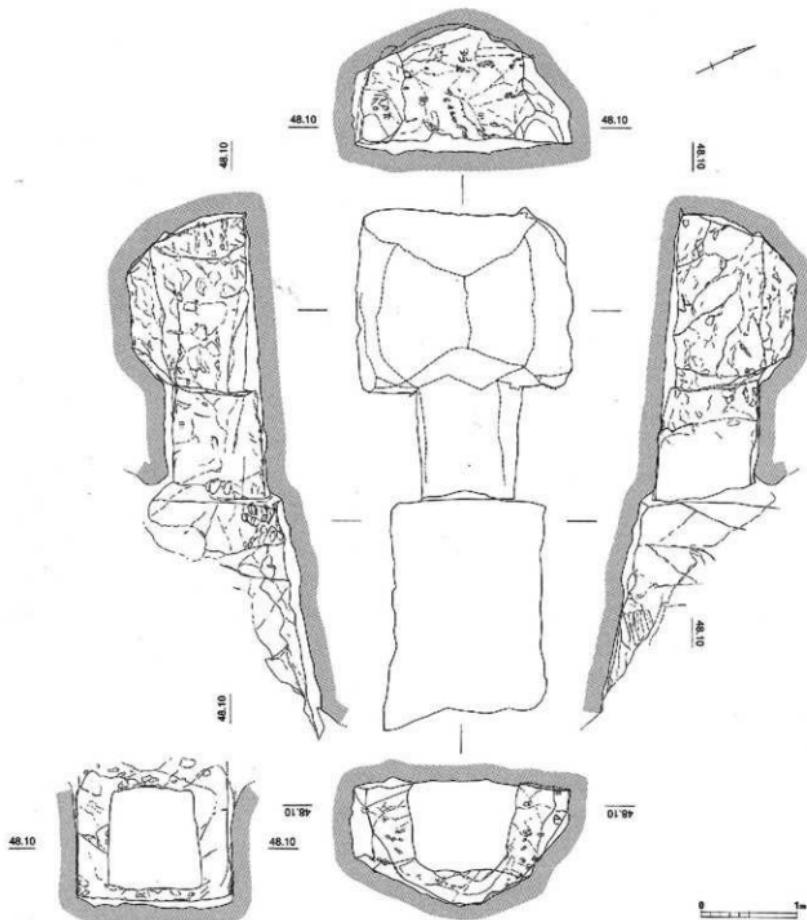
第22図
7号横穴墓 床面加工状況

また、床面では壁面近くには円刃による加工痕が多いものの、中央部分については溝状加工痕が多くなっている。この溝状加工痕は奥へ向かって放射状に残っている。

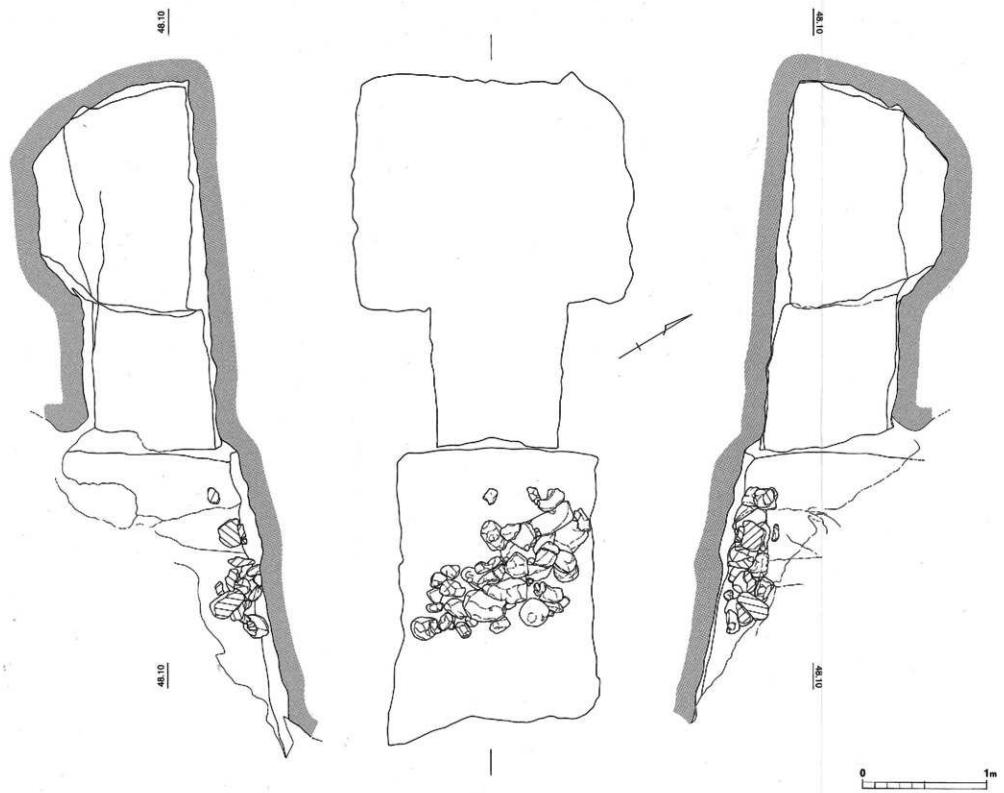
閉塞状況（第24図）

前庭部に人頭大の栗石が残されていた。その場所が前庭の中央部に積み上げられた状況で検出されたため、盗掘もしくは追葬の際取り除いた閉塞石を積み上げておいたものと考えられる。

これらの閉塞石は床面に直接積まれており、盗掘もしくは追葬の時は玄室だけを掘り直したのではなく、前庭部分についても再度露出させた可能性を示している。



第23図 7号横穴墓 遺構実測図



第24図 7号横穴墓 閉塞石出土状況

土層堆積状況

昭和53年度の調査の際に完掘されており、それ以後の堆積であるため省略する。前庭外の土層は残存していなかった。

遺物出土状況

この横穴墓においては遺物は出土していない。ただし、7号横穴墓の下方において、須恵器高壺が表探されており、その位置関係より考えるとこの横穴墓に伴う可能性がある。この遺物については遺構外の遺物の項で述べる。

第3グループ

第17支群の中でも尾根の先端に近い場所に形成されているグループである。第1・第2グループとは別に分布する狭い凝灰岩層に2段に分け造墓されている。

8号横穴墓

比較的大型の横穴墓である。

開口方向はE~36°~Sである。

遺構(第25・26図)

前庭

羨門部幅1.33m、長さ1.62mを測る。比較的長い前庭である。床面には方形の掘り込みが検出できだが、用途については不明である。この上部には閉塞石と考えられる大きな凝灰岩が置かれていたが、この凝灰岩は掘り込みよりも大きく、閉塞石のために掘られたものとは断定できない。

羨道

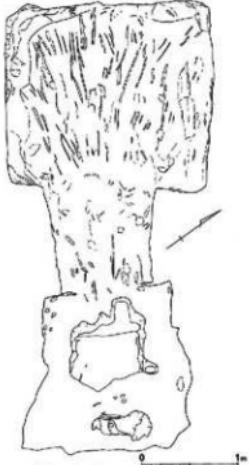
最大幅1.16m、最小幅0.95m、長さ0.95m、高さ0.97mを測る。平面プランは縦長逆台形を呈しており、7号横穴墓と類似する。そのため、断面形は羨門部では縦長長方形、玄門部では横長長方形を呈する。床面、壁面、天井の界線はいずれも明瞭であり、しっかりとされた作りになっている。また、羨門部の両端には段が設けられているが、中央部分ではその段がなくっている。

加工痕はあまり残っていないが、壁面に円刃加工痕を確認することができた。

玄室

幅2.14m、長さ1.92m、高さ1.37mを測り、大型の部類に入る。平面プランは横長長方形であり、玄室形態は家形妻入りを呈している。玄室を構成するすべての線が明瞭であり、しっかりとされた作りになっている。

天井部は棟線から軒線にかけて一貫して削ったと考えられる加工痕が残っている。これはアーチ形の横穴墓でも見られる手



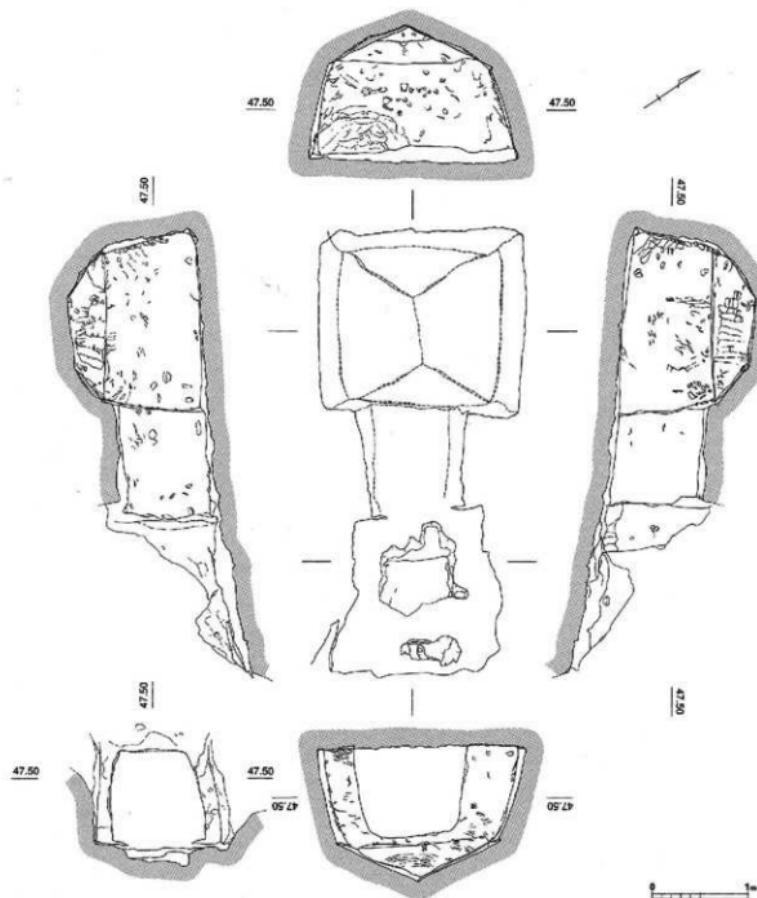
第25図
8号横穴墓 床面加工状況

法である。壁面の加工痕はあまり残されていないものの、床面には一面溝状加工痕が残っている。これも、7号横穴墓同様、奥へと向かって放射状に付けられている。

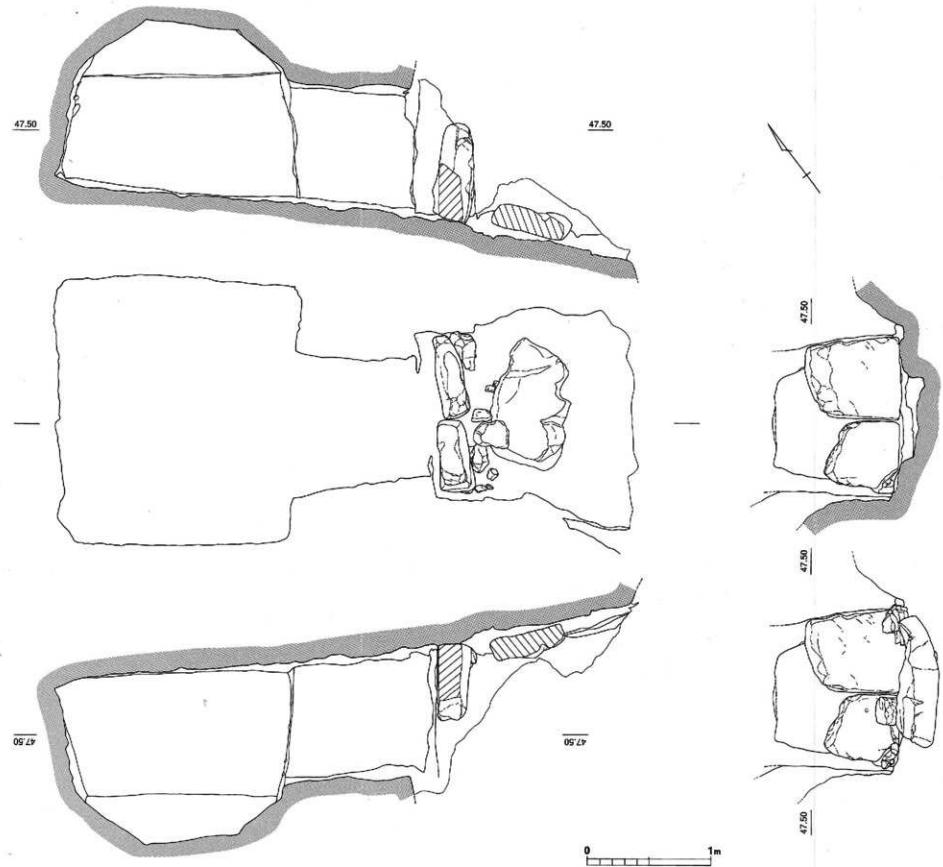
閉塞状況（第27図）

基本的には2枚の凝灰岩板石によって閉塞されている。また、前庭の床面には前庭の幅いっぱいに大きなほとんど加工されていない凝灰岩が置いてあり、閉塞している2枚の板石を支えていたものと考えられる。

土層堆積状況（第27図）



第26図 8号横穴墓 遺構実測図



第27図 8号横穴墓 閉塞石出土状況

閉塞石が残存しているため、羨道より奥には土砂の流入は少なかった。また、前庭外についてもその急斜面のため土の堆積はほとんど見られず、前庭に堆積した土層のみが観察できた。

堆積状況で見る限り、自然に堆積しているようである。ただ、8層については前庭に置かれていた大きな凝灰岩の下に堆積しており、閉塞した際の置土である可能性がある。

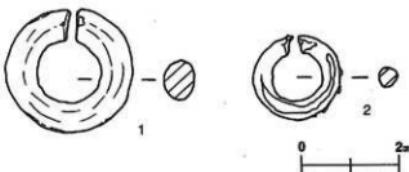
遺物出土状況

前庭部の表土より金環が1点出土した。また、玄室内に薄く堆積している表土からも金環1点が出土している。これらは排土中から出土したため、正確な場所は把握できないものの、出土層より、盗掘を受けた際に残されていったものと推定できる。

出土遺物（第28図）

1・2とも銅芯渡金の耳環である。

詳細は遺物観察表にゆづる。



9号横穴墓

遺構（第30図）

この遺構は新たに発見されたもので、横穴墓

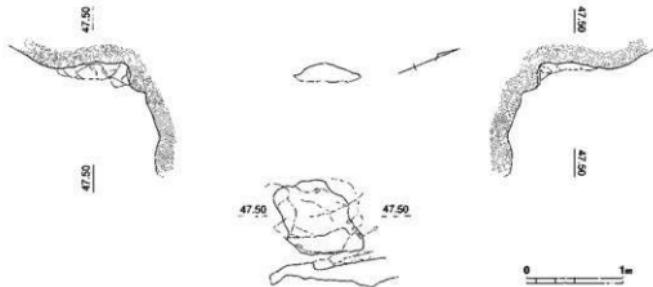
と言うよりは凝灰岩に造られた浅い掘り込みである。幅70cm、奥行き18cmを測るが、きちんとした加工痕を認めることはできなかった。

遺物出土状況（第29図）

この遺構からは須恵器高杯が転げ落ちるような格好で出土している様子が確認できた。この下方の岩盤上からは須恵器及び鉄鏃が出土しており、8号横穴墓及び10号横穴墓のどちらか若しくは両方に伴って、供獻物を置いておくための施設であると考えられる。



第29図 9号横穴墓 遺物出土状況



第30図 9号横穴墓 遺構実測図

出土遺物（第31図）

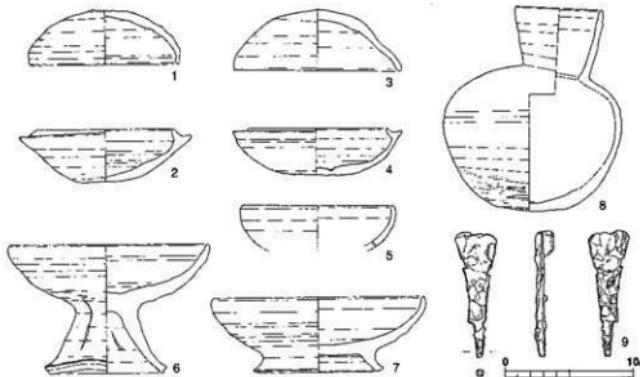
須恵器平瓶 1点・壺蓋 1点・壺身 4点及び鉄鏃 1点が出土した。壺身 5・7 が破片で出土した以外はほぼ完形で出土している。

3は壺蓋である。1は内面に1条の沈線を施しているものの、肩部には沈線等が見られず、また、天井部のヘラケズリも見られない。3は内外面とも沈線はみられず、口縁端部は肥厚するタイプのものである。2・4は受部を持つ壺身である。2は口縁部が大きく外側へ張り出す一般的な壺身であるが、4はそれと比較して内側に向いている。5は受部が付かない壺身であり、出土は見られなかったものの乳頭状のつまみをもつ壺蓋が伴う可能性が高い。6は2方向に切れ込み状の透かしを持つ無蓋低脚高壺である。7は高台を持つ大型の壺身である。8は平瓶である。底部に丁寧なヘラケズリを施している。

時期としては高壺 6・壺蓋 1、3・壺身 5より出雲 6期が考えられる。また、高台付壺身 7の出土が見られるため、出雲 6期 d である可能性が高い。

鉄鏃 9は風化が激しいが、先端が平たくなる形式のものである。

出土遺物の詳細については遺物観察表にゆずる。



第31図 9号横穴墓 出土遺物実測図

10号横穴墓

非常に精緻な小型の妻入り家型横穴墓である。

開口方向はE~37°~Sである。

遺構（第32・33図）

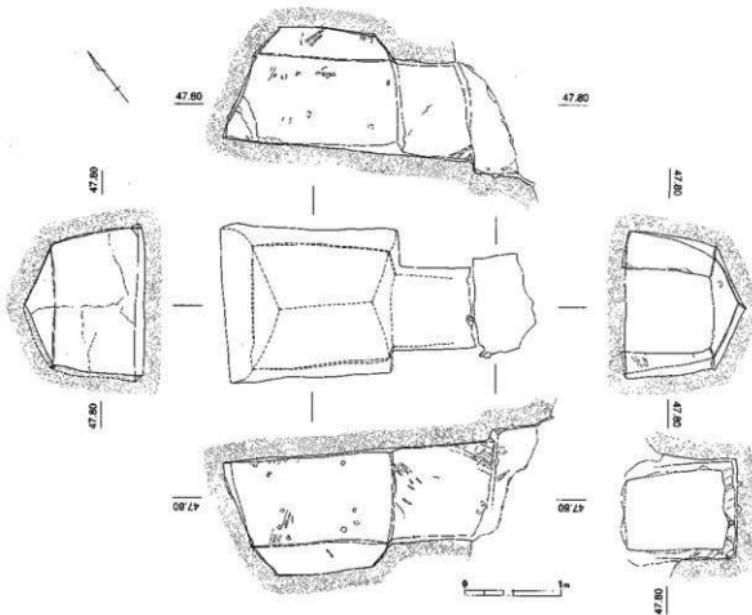
前庭

幅1.03m、長さ0.64mを測る。非常に狭く、短い前庭部であり、当初は崩れてしまったものと考えていたが、この下より遺物の出土も見られることから、地形の制約により短くならざるを得なかつたのではないかと思われる。

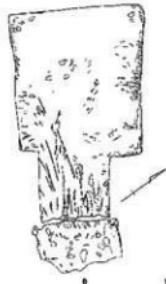
壁面は非常に平滑に調整されているため、加工痕が残存していないが、床面に円刃による加工痕が多く見られる。

羨道

幅0.86m、長さ0.82m、高さ0.97mを測り、平面プラン及び断面形は縦長長方形を呈している。玄室の中心よりも若干西よりに付けられており、そのため、玄室の袖部分の幅が違っている。また、壁面は羨道も玄室と同様、非常に平滑に調整されている。床面については多くの溝状加工痕が見られる。



第32図 10号横穴墓 遺構実測図



玄室

幅1.55m、長さ1.84m、高さ1.19mを測る。平面プランは長方形を呈し、若干古い要素を残しているといえよう。軒線及び壁と床面の境は明瞭に造られている。また、壁面、天井の各面は非常に平滑に調整されており、加工痕を認めるのも困難なほどである。床面も比較的平滑に調整されているが、壁面近くについては円刃による加工痕が多く残されている。

また、奥壁の傾斜が非常に大きいことが特徴的である。

閉塞状況（第35図）

第33図

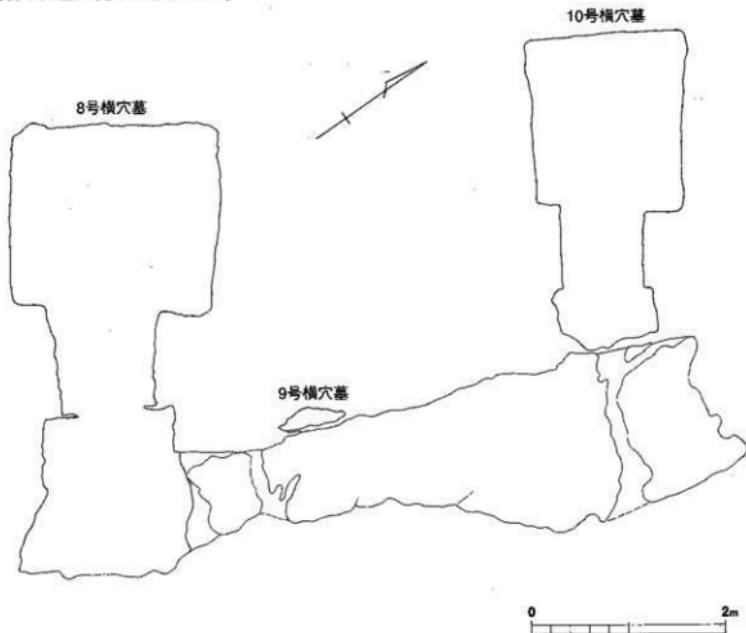
10号横穴墓 床面加工状況 の凝灰岩は加工されている。また、前庭外には大きな凝灰岩を2点検出することができた。10号横穴墓はこれらの凝灰岩によって閉塞されていたと考えられる。前庭にある凝灰岩は前庭の角に接しており、ほぼ原位置を保っていると考えられる。

土層堆積状況

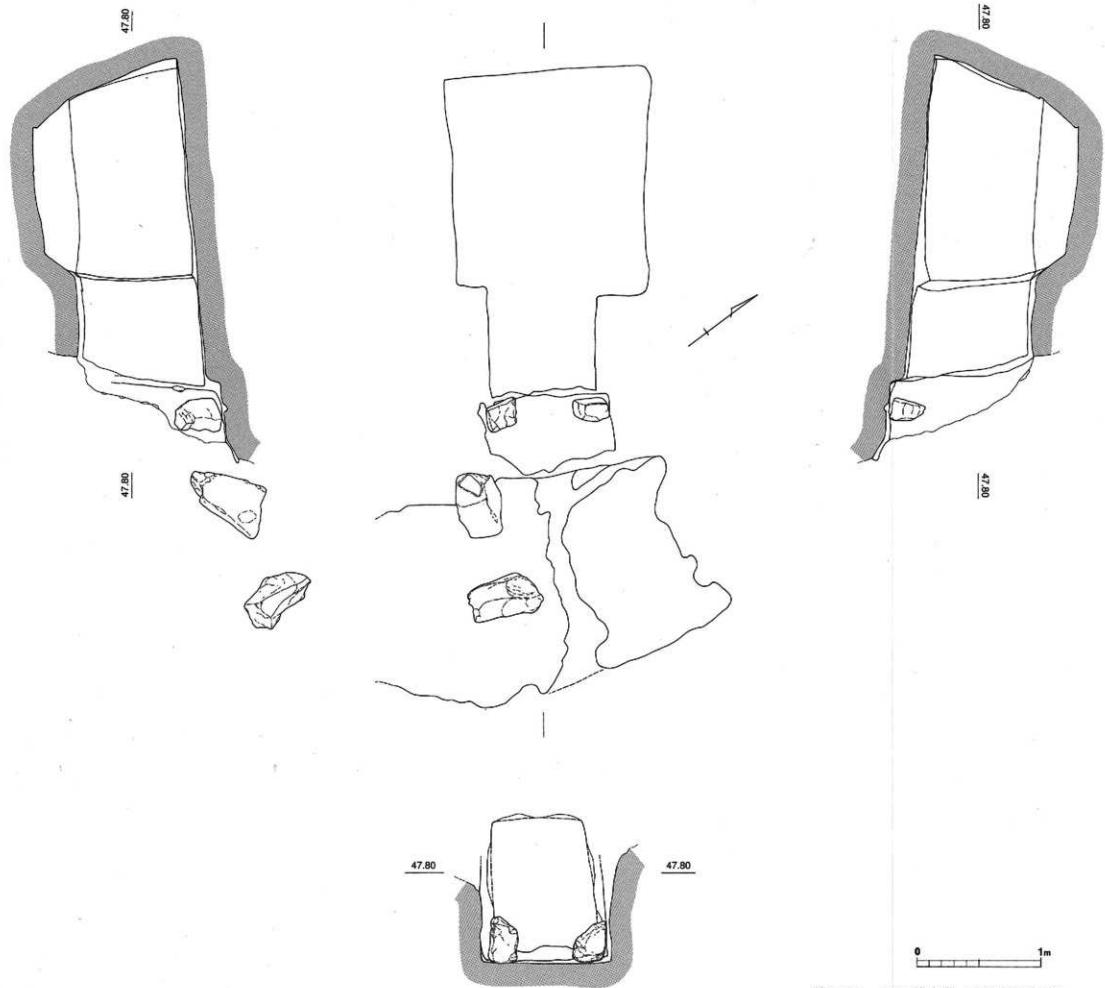
昭和53年度の調査の際に完掘されているため、省略する。

遺物出土状況

遺物の出土は見られなかった。



第34図 8号、9号、10号横穴墓 配置図



第35圖 10号横穴墓 閉塞石出土状況

8号・9号・10号横穴墓の関連性（第34図）

9号横穴墓は供獻物専用の施設である可能性がある。しかし、墓として使用された8号・10号横穴墓より時期を比定できる遺物が出土していないため、9号横穴墓との関連性を指摘できない。

しかし、8号・9号・10号横穴墓は第3グループの中でも上段に位置しており、8号横穴墓の前庭の壁面が低く造られていることからも、8号横穴墓は9号横穴墓を意識して造墓した可能性があるのではないだろうか。また、10号横穴墓との関連は断言できないものの、その立地より考えるところからの関連があるのではないかと思われる。

11号横穴墓

非常に精美に加工された、玄室形態が妻入り家型を呈する横穴墓である。

開口方向はE~35°~Sである。

遺構（第36・37図）

前庭

幅1.95m、長さ1.74mを測り、比較的長い前庭を持っている。壁面の残りも良く、最大高1.4mに達する。壁面と床面との境は明瞭である。

壁面は風化により加工痕を認めることができない。一方床面には多くの溝状加工痕が放射状に残されており、羨門近くでは円刃による加工痕が多く認められる。

羨道

幅1.09m、長さ0.9m、高さ1.16mを測る。平面プランは横長長方形を呈し、断面形は縦長の台形を呈している。壁面と床面の境及び壁面と天井の境は非常に明瞭である。羨門部では段が設けられており前庭より高くなっている。また、玄門部では玄室よりも一段低くなっている。玄室、羨道、前庭の各部分が明確に区別されている。

壁面は平滑に調整されているが、床面には円刃による加工痕が認められる。

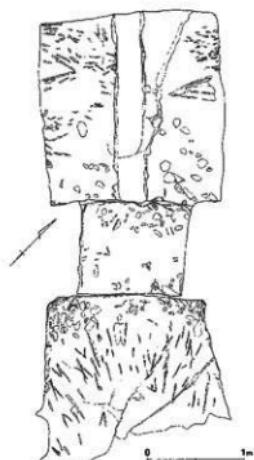
第36図

11号横穴墓 床面加工状況

玄室

幅1.91m、長さ2.06m、高さ1.66mを測る。家形妻入りの玄室形態を呈する。壁面と床面の境及び家形を構成する線全てが明瞭につけられている。各面ともに粗掘段階でついたと思われる刺突痕を多く残すものの、壁面、天井及び床面は非常に平滑に加工されており完成された横穴墓であるといえよう。

また、内部施設として、床面の両脇には屍床が造り出されている。



閉塞状況（第38図）

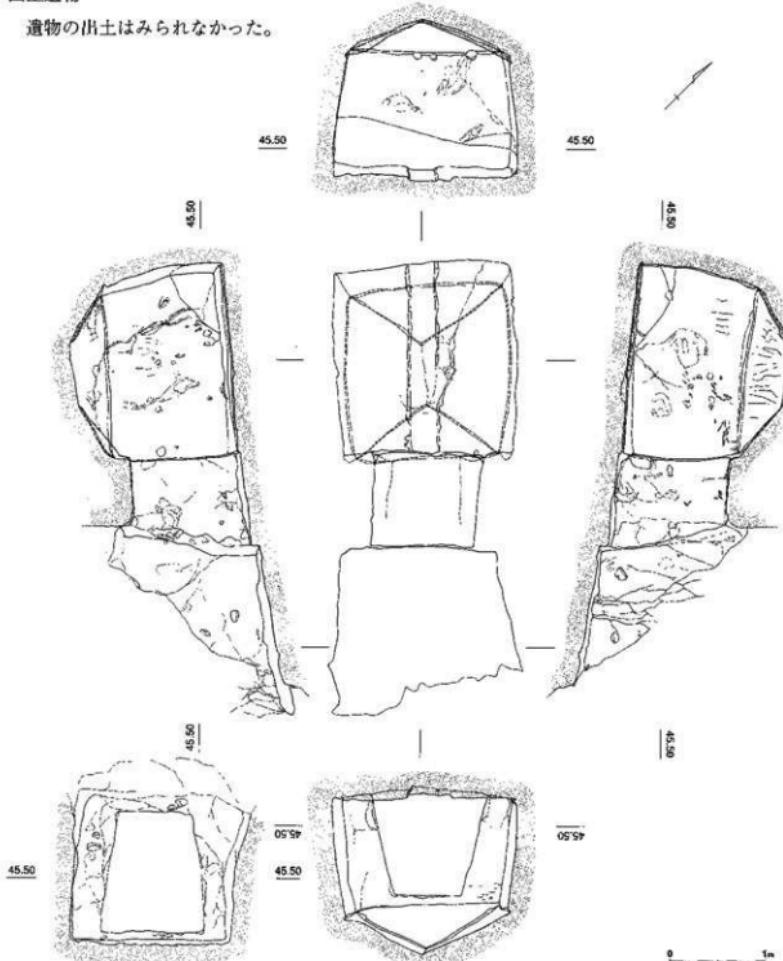
玄門部と羨門部に直方体の凝灰岩切石が床面上に置かれていることが確認できた。閉塞石の一部が残されたものと考えられるが、玄門部の凝灰岩は玄門の敷居として置かれている可能性もある。

土層堆積状況

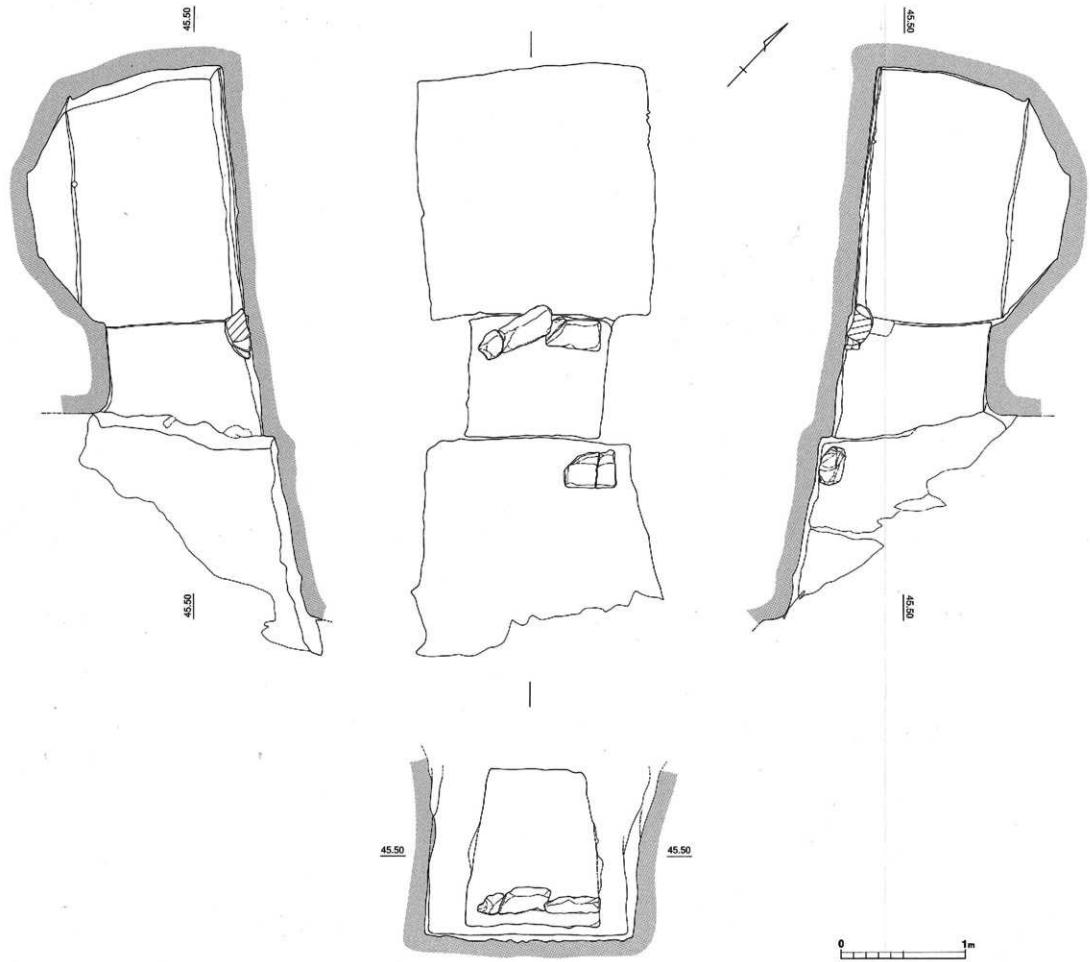
前回の調査の際に完掘されているため省略する。なお、前庭外については土層の堆積がなかった。

出土遺物

遺物の出土はみられなかった。



第37図 11号横穴墓 遺構実測図



第38图 11号横穴墓 闭塞石出土状况

12号横穴墓

11号横穴墓の右下方に造られた未完成の横穴墓である。

開口方向はE~40°~Sである。

遺構(第39図)

前庭

前庭と思われる場所は検出できていない。

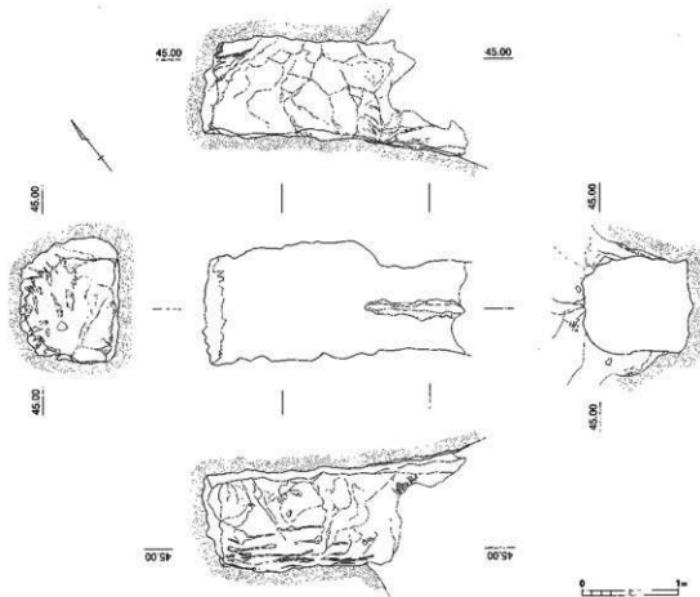
羨道

幅0.93m、長さ0.85mを測る。天井については崩落しているため知ることはできない。羨道中央部においては幅0.22mの溝が玄室出口付近より付けられており、排水溝としての役割を果たしていたと考えられる。

玄室

幅1.23m、長さ1.8m、高さ1.04mを測る。玄門右側については羨道が狭くなり、袖部がつくられているものの、左側については玄室壁面がそのまま羨道へと移行している。

玄室断面形はアーチ型を呈しているが、天井部の奥から溝状加工痕が明瞭に残されており、ゴツゴツした印象を受ける。床面については加工痕があり確認できず、岩盤のひび割れによる段差が見られるものの、平滑と言っても良いであろう。また、床面と壁面の界線ははっきりとしているが、壁面と天井部分についてははっきりとした境目が見られない。



第39図 12号横穴墓 遺構実測図

土層堆積状況

昭和53年度の調査で完掘されているため省略する。

遺物出土状況

この横穴墓においては、遺物の出土は確認されていない。

出土遺物がみられないものの、床面の状況と排水溝の存在から墓として利用されていた可能性がある。ただし、墓として使用したかどうかという問題を抜きにしてみても、この横穴墓の玄室には加工痕が多く残されており全体的に未完成であるため、造墓途中であることは間違いないと思われる。何らかの事情で未完成のまま墓として使用しなければならなかつたのであろう。

13号横穴墓

開口方向はE～32°～Sである。

遺構（第40・41図）

前庭

幅1.74m、長さ0.8mを測る。床面と壁面の境はしっかりとしており、造りにルーズな様子はない。

羨道

幅1.1m、長さ1.0mの若干横長の羨道である。高さについては崩落が著しく正確な数値は不明であるが、若干残存している軒線より0.9m以上はあったと思われる。羨門においては一段前庭よりも高くなっている、羨道と前庭の区別が明確である。

風化が激しいため、加工痕についてははっきりとしないが、下の方に平刃によって付けられたと考えられる加工痕が残されている。

玄室

幅1.9m、長さ1.75m、高さ1.5mを測る。平面プランは若干横長方形であり、玄室形態は家形妻入りを呈している。床面と壁面の境は明瞭であるものの、軒線や四注線については風化が激しく所々崩落している。

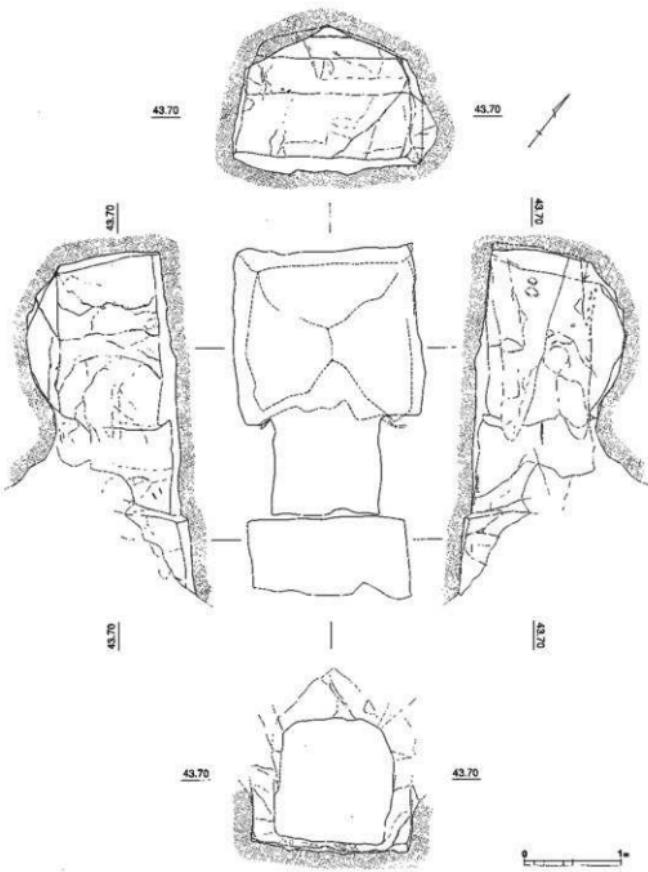
全体的に風化による剥離が激しいため加工痕はほとんど残っていないが、壁面に大型の円刃で付けられたと思われるものや、軒線上に断面長方形の工具で付けられたと考えられるものが若干認められる。

なお、玄室左側の側壁に崩落が見られる。また、玄門部付近より羨道にかけての天井は大きく崩落している。



第40図

13号横穴墓 床面加工状況

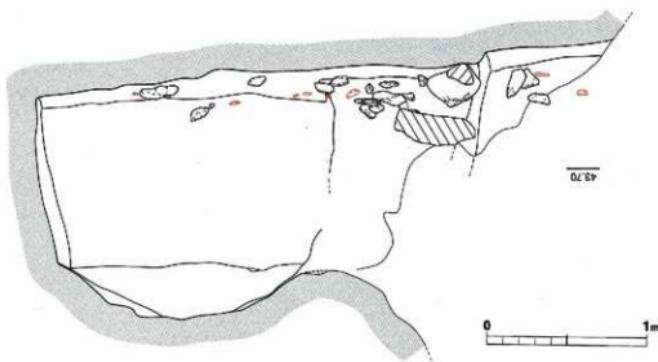
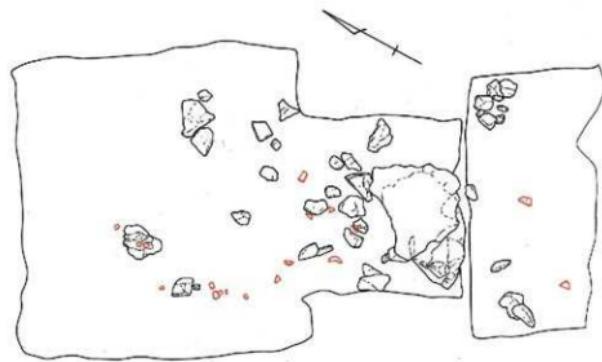
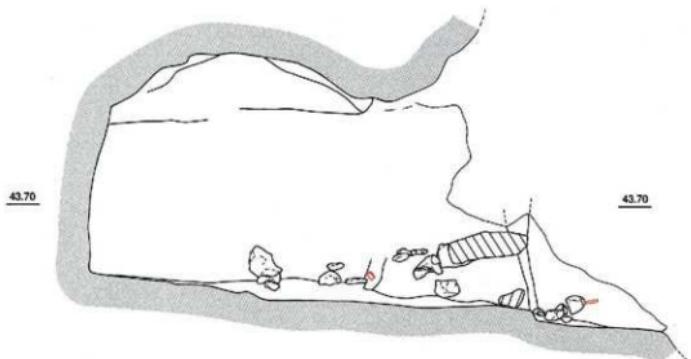


第41図 13号横穴墓 造構実測図

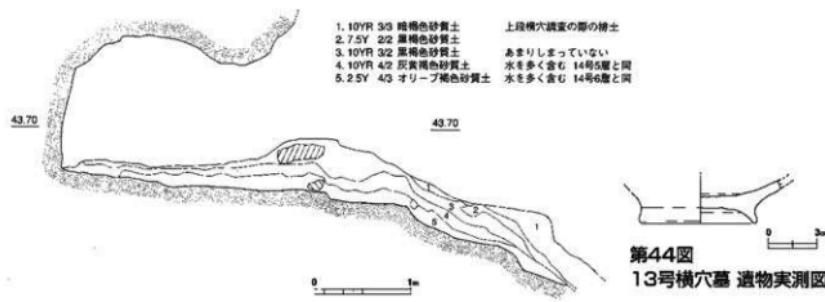
土層堆積状況（第43図）

堆積状況を見る限り、ごく自然な堆積である。ただし、4層より土師質土器片が出土している。
遺物出土状況（第42図）

土師器片が出土している。しかし、どの遺物も風化が激しく形になるものは1点しか出土しなかつた。また、一ヵ所にまとまって出土しておらず、玄室内にまばらに散乱しているという状況である。



第42図 13号横穴墓 遺物出土状況



第43図 13号横穴墓 土層堆積状況図

出土遺物（第44図）

実測に耐えうるものは1点のみであった。土師器の高台部である。風化が激しく調整を認めることはできない。時期は不明である。

14号横穴墓

17支群の中で最も尾根の先端に位置する横穴墓である。

開口方向はE～20°～Sである。

遺構（第45図）

前庭

幅1.71m、長さ0.44mを測る。残存している前庭は非常に短いが、前庭外の様子より見ると風化して、現在の長さになっていると考えられ、造墓当時は現在よりももっと長かったと思われる。

床面、壁面とも角礫が多く含まれる凝灰質砂岩に造られており、風化が激しいため、加工痕を認めることができない。

羨道

幅1.01m、長さ0.83m、高さ1.17mを測る。平面プランは横長長方形、断面形は縦長台形を呈している。各面の境は風化のため明瞭ではない。加工痕も認めるることは困難である。

玄室

幅1.95m、長さ1.9m、高さ1.47mを測る。平面プランはほぼ正方形の妻入家形横穴墓である。床面と壁面の境や家形を構成する線は風化のため明瞭ではない。特に左上方の天井については岩盤の剥落が激しい。

全体的に完成はしているのであろうが、細かいところでの調整などはされていないようである。加工痕はほとんど認めることはできない。

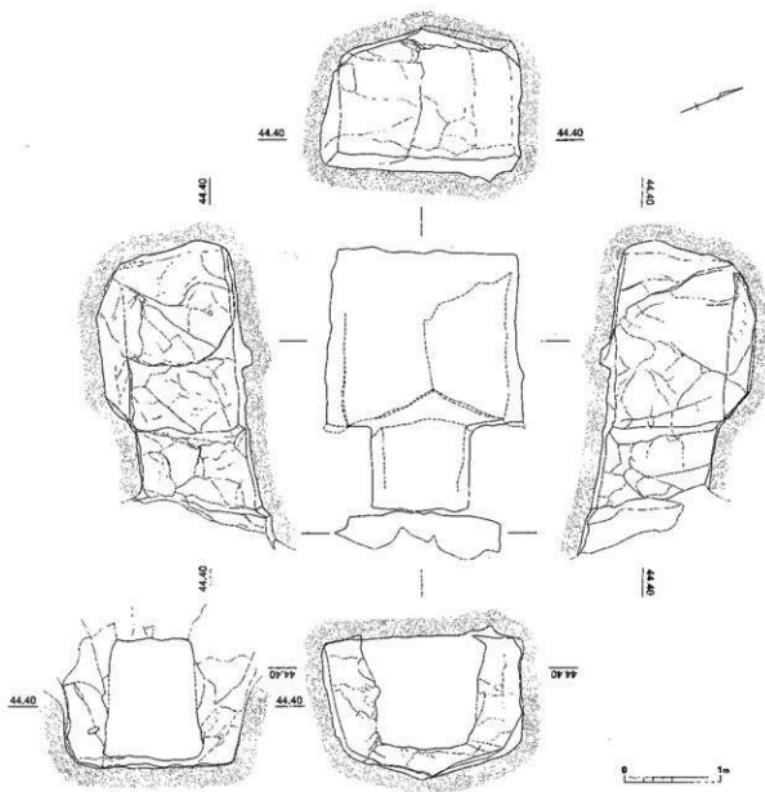
第44図
13号横穴墓 遺物実測図

土層堆積状況（第46図）

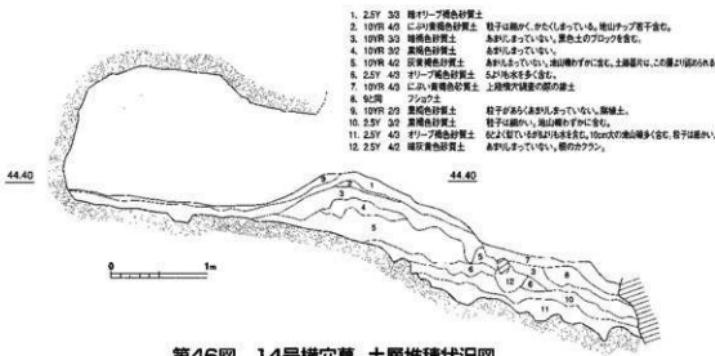
6層、10層、11層は、地山とほぼ同色であり地山のブロックも多く含むことから、地山の風化土と考えられる。また、5層中より土師器片が出土しており、横穴墓を再使用したと考えられるが、どのような用途で再利用したのかについては不明である。

遺物出土状況

5層中より土師器片1点が出土した。また、10層中より須恵器高杯脚部が1点出土した。地山が風化していく過程で混入したものであろうか。



第45図 14号横穴墓 遺構実測図



第46図 14号横穴墓 土層堆積状況図

出土遺物（第47図）

1は須恵器長脚無蓋高杯の脚部である。2方向に切れ込み状の透かしを施しており、出雲5期～6期に比定されるものである。

その他詳細は遺物観察表にゆずる。

2は土師器の底部である。風化が激しく調整は不明である。



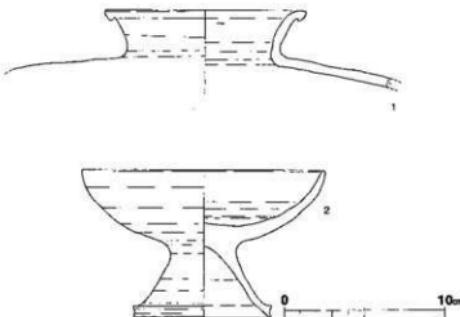
第47図 14号横穴墓 出土遺物実測図

遺構外の遺物（第48図）

遺構外で2点の遺物を採集しているので、報告しておく。

1は須恵器大甕の口縁部である。口縁端部が下方にわずかであるが拡張している。

2は須恵器無蓋低脚高杯である。7号横穴墓の下方で採集されたものであり、これに伴う可能性がある。出雲5期～6期に比定されるものである。



第48図 遺構外出土遺物実測図

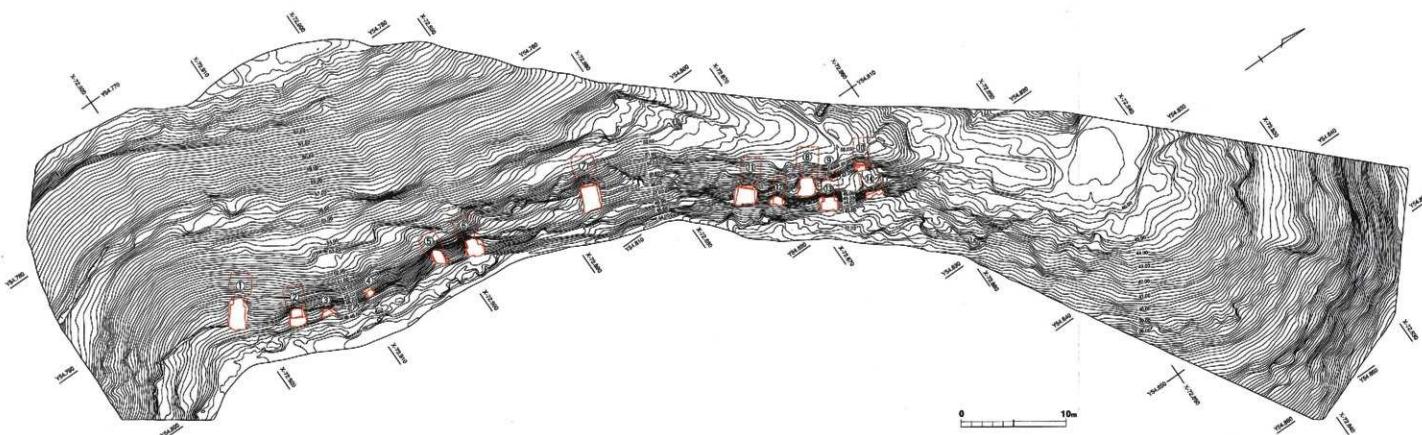
小 結

冒頭にも述べたが、第17支群のほとんどが以前に調査されており、新たな調査成果は数少ないものであった。前庭外の調査についても、立地が急斜面ということもあって覆土がわずかしか残っておらず、ほとんどの横穴墓については調査らしい調査ができなかった。

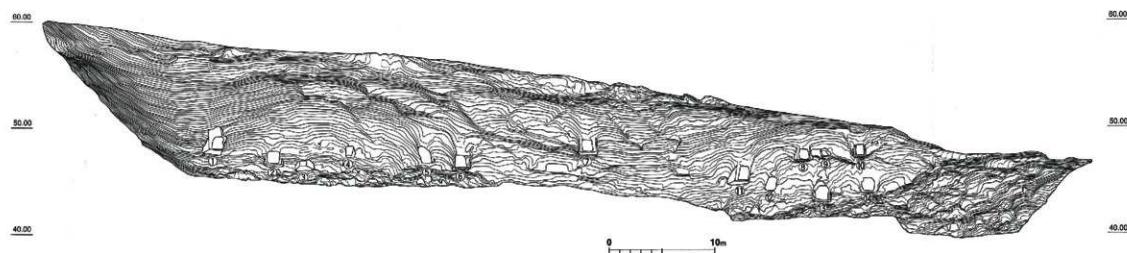
しかし、造墓途中で廃棄したと考えられる3号横穴墓、供獻用の施設と考えられる9号横穴墓といった新たな遺構が確認できたこと、また、昭和53年度に調査された横穴墓も含め、全ての横穴墓の遺構実測を実施できたことは意味があったのではないだろうか。

第17支群では全部で14基の横穴墓（造墓途中等を含む）が造墓されている。上塩治横穴墓群の中でも22支群（21基）に次ぐ2番目に大きな支群である。そのためか各横穴墓の形、規模は様々である。この周辺ではポビュラーな玄室形態である家形妻入横穴墓がほとんどであるものの、家形平入横穴墓が1基（6号横穴墓）含まれていることも特筆すべきである。また、家形妻入横穴墓についても、ほとんどの横穴墓の平面プランが正方形を呈する中に長方形を呈するもの（10号横穴墓）も含まれている。

このように第17支群の形態はバラエティーに富んでいるものの、墓として使用されていたと考えられる横穴墓は、すべて昭和53年度の調査の時には既に開口しており、盗掘を受けていたようである。そのため出土遺物などの時期や被葬者の手掛かりとなるものは非常に少なく、第17支群の中で横穴墓造墓の過程や横穴墓の変遷を考えることは困難であるが、第22支群で捉えられたようなこれらのことを考える上での資料となることを期待する。



第49図 第17支群 遺構配図(平面)



第50図 第17支群 遺構配図(立面)

上治横穴墓群第17支群 遺物観察表

括図 番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
10-		1号横穴墓 玄室	坏身 須恵器	口径：9.9 器高：3.6	外面：横ナデ ヘラケズリ 内面：横ナデ・ナデ	密	良好	内外面：灰色	完形 昭和53年度 調査時出土
11-1	図版30	1号横穴墓 前庭外	大甕 須恵器	口径：(38.9) 器高：15.5	外面：横ナデ 内面：横ナデ	1mm以下 の細粒や や含む	良好	内外面： 暗青灰色	残存4/8 外面に波状文 沈線で区画する
11-2	*	1号横穴墓 前庭外	大甕 須恵器	口径：20.1 器高：55.5	外面：平行タタキ 内面：同心円文當て具痕	1mm以下 の細粒や や含む	良好	内外面： 暗青灰色	ほぼ完形
31-1	図版31	9号横穴墓	坏蓋 須恵器	口径：11.6 器高： 4.2	外面：横ナデ 頂部にヘラケズリ 内面：横ナデ・ナデ	1mm以下 の細粒や や含む	やや 不良	内外面：灰白色	残存7/8 口縁内部に 1条の沈線
31-2	*	9号横穴墓	坏身 須恵器	口径：10.6 器高： 4.1	外面：横ナデ 頂部にヘラケズリ 内面：横ナデ	2~3mm の小石を 含む	やや 不良	外面：灰黄色 内面：灰白色	完形 外面に灰を破る 一部釉化
31-3	図版32	9号横穴墓	坏蓋 須恵器	口径：12.4 器高： 4.5	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ナデ	1mm以下 の細粒や や含む	やや 良好	外面：灰色 内面：灰白色	完形 外面に一部に 灰を被る
31-4	*	9号横穴墓	坏身 須恵器	口径：10.7 器高： 3.6	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ナデ	1mm以下 の細粒や や含む	やや 良好	外面：灰色 内面：暗灰色	ほぼ完形
31-5		9号横穴墓	坏身 須恵器	口径：(11.6) 残存高：3.3	外面：横ナデ 内面：横ナデ	1mm以下 の細粒わず かに含む	良好	内外面：灰色	残存1/4 反転復元
31-6	図版32	9号横穴墓	高坏 須恵器	口径：15.4 器高：10.0 脚部径：8.6	外面：横ナデ 坏部底はヘラケズリ 内面：横ナデ	1mm程度 の砂わず かに含む	やや 良好	内外面：灰色	脚部一部欠損 脚部に2方向の切れ 込み状透かし穴
31-7	図版33	9号横穴墓	坏身 須恵器	口径：16.5 器高： 5.8 高台径：9.0 高台高：1.3	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ナデ	1mm以下 の細粒や や含む	良好	外面：暗灰色 内面：灰白色	残存3/5 外面に灰を被る 底部へラ切り
31-8	*	9号横穴墓	平瓶 須恵器	口径： 6.7 胴部最大幅： 13.4	外面：横ナデ 底部はヘラケズリ 内面：横ナデ	1mm以下 の細粒わず かに含む	良好	内外面：灰色	完形 外面に灰を被る
44-	図版34	13号横穴墓 玄室	坏身 土師器	高台径：7.0 高台高：0.9 残存高：2.8	風化のため調整不明	1mm以下 の細粒多 く含む	不良	内外面： 淡黄褐色	高台部のみ残存 風化が著しい
47-1	*	14号横穴墓 前庭外	底部 土師器	底部径：6.0 残存高：1.8	風化のため調整不明	1mm以下 の細粒や や含む	不良	外面：淡黄色 内面：明黄褐色	風化が著しい

挿図番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
47-2	図版34	14号横穴墓 前庭外	高坏 須恵器	脚部径：6.2 残存高：7.0	外面：横ナデ 内面：ナデ	1mm以下 の細粒わず かに含む	良好	外面：暗青灰色 内面：灰色	脚部3方向に 切り込み状透かし次 外面に灰を被る
48-1	図版35	遺構外	横瓶 須恵器	口径：12.4 残存高：4.8	外面：格子目タタキ 横ナデ 内面：同心円文当て 具痕・横ナデ	1mm以下 の細粒わず かに含む	良好	内外面：灰色	残存3/4
48-2	タ	遺構外	高坏 須恵器	口径：15.1 器高：9.2 脚部径：8.4	外面： 内面：	1mm以下 の細粒わず かに含む	やや 不良	内外面：灰白色	残存3/5

挿図番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	備考			
28-1	タ 図版31	8号横穴墓 排土中	耳環	外径：1.8 内径：1.0 厚さ：0.4	銅芯に塗金を施す 金の剥がれている場所がみられる			
28-2	タ	8号横穴墓 排土中	耳環	外径：2.6 内径：1.3 厚さ：0.8	銅芯に塗金を施す 金の剥がれはあまり認められない			
31-9	図版33	9号横穴墓 鉄罐		全長：9.6 蓋部長：2.6 刀部先端幅：3.2	錫化が著しい			

上塙治横穴墓群 第17支群

図 版

調査前 全景



調査後 全景



調査後 8~14号横穴墓





調査後 1~6号横穴墓



1号横穴墓 調査前



1号横穴墓 遺物出土状況①



1号横穴墓 遗物出土状况②



1号横穴墓 遗物出土状况③



1号横穴墓
前庭外土层堆积状况



1号横穴墓
閉塞石検出状況①



1号横穴墓
閉塞石検出状況②



1号横穴墓 完掘状況

